Smile

インレ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある女神と教祖と２人の少女の交流のお話。

両作品ともアニメ版しか触れたことがないので、設定やキャラクターが違っていたらごめんなさい。

皆様からのご感想、大歓迎でございます。

目　次

更識簪と女神スカイハートの章
女神と簪 ―― 1
気晴らし ―― 7
逃げることは決して悪いことじゃない ―― 12
心の拠り所 ―― 16
本音 ―― 20
Ｗｈｏ☒ｓ ｔｈａｔ ｇｉｒｌ ？ ―― 24
プレゼント ―― 28
お姉さんとて同じ事 ―― 32
ブランコ問答 ―― 34
京都 ―― 39
イストワール ―― 43
エピローグ ―― 48
幕間
未知との遭遇 ―― 51
帰ってきた打鉄弐式 ―― 54
クーリェ・ルククシェフカと教祖イストワールの章
イストワールとクーリェ ―― 61
もう、乗りたくない。怖い思いするのは、もう沢山だ。 ―― 66
脱出前夜 ―― 71
大団円 ―― 75
引越し ―― 83

更識簪と女神スカイハートの章

女神と簪

「何でお姉ちゃんのようにできないんだ」

「お姉ちゃんよりも成績が悪い……。お姉ちゃんはオール5なのに、貴方には4が一つ付いている」

またこれだ。何をしても褒められたことがないなぁ。ずっとお姉ちゃんはどうだ、お姉ちゃんはこうだということばかり……。

たしかに姉さんは優秀だよ。文武両道で何でもこなす完璧超人。苦手なのは編み物という些細なことぐらい。そして今は家の当主だ。

それに比べて、私ときたら何処に行くにも何をするにもやれ貴方のお姉さんはどうだったとか、お姉さんに比べると良くないとかそんなことばっか。

成績だってそうだ。今回は一教科だけ成績が4だったことでこう言われる。一つでも4がついたらこれだ。普通の家ならまずそんなことは起こりはしない。そりゃ、私の家がとても大事な役目を担っている特別な家なのは知ってるよ。だからといって何でこんなにまで言われなきゃいけないの？

お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん、お姉ちゃん……、どこに行ってもお姉ちゃんのことが付いてくる。そして私は劣化品扱いだ。

「やれやれ、やっと終わったよ。お姉ちゃんのようになりなさい……か……」

どうやってあんな天才になれって言うんだ。私は残念ながら天才ではない。姉さんにも言われたが無能だ。少しずつ進歩していくしかないのに。

家にいるのも嫌になり、フラフラと外に出る。付き人も付けずにフラフラと歩いていると懐かしい場所に出た。

「昔よく遊んだ公園だ」
黄色い滑り台に砂場、赤塗りのブランコに青い少し錆びついたシーソー……、小さな頃はここでよく遊んだんだっけ。姉さん達と一緒に。楽しかったなぁ。あの時は。姉さんとも仲良かったんだよね。
ブランコに腰掛けて少し揺らす。
「少しベタだけど何だか落ち着く」
「そりゃーよかったー」
不意に横から声がした。間延びした何とも気の抜けた声だ。
ギョッとして横を見てみると、隣にあったブランコに私と同い年くらいの女の子が腰掛けていた。
今まで櫛なんか入れたことがないようなくしゃくしゃの長い黒髪に継ぎ接ぎだらけのコートにロングスカート、そして草臥れたロングブーツという何ともみすぼらしい見た目の子だった。顔は髪に隠れていてよくわからない。
「この公園はねー、もーうかれこれ数年くらい人が来なくてねー、久しぶりにここに来る人がきてくれて嬉しーよ」
そう言いながら女の子はこっちを向いた。
緑の虹彩の入ったまん丸な目をしていて、その上に丸眼鏡をかけた可愛らしい顔だ。この辺りでは見たことがない。
「貴方は……だれ？」
「私？　私はねー、夕凪。この公園にすんでいる女神様なのだー」
随分とみすぼらしい女神がいるもんだ。

「昔よく来てくれた女の子だよねー。また来てくれて嬉しいよー」
「どういたしまして……」
なんだか変な人に絡まれたなぁ。女神って……。
それにしても随分と昔のことを覚えてるんだなぁ。私が遊んでいた時なんてもう１０年近く昔のことなのに。
「今日は他の子はいないのー？」

「……いない、……です」
「そっかー。まぁ、そんなことはどうでもいいや。こんな所にまた貴方が来てくれた。そのことがとっても嬉しいから」
間延びした口調を女神は急に辞めた。
そしてコートからやおらランタンを取り出してブランコに引っ掛けた。
「ゆっくりしていってね」

「何でランタンを？」
「ここはね、一息つきたい人がゆっくりしていく場所なんだぁ。いわば休憩室みたいなものかなぁ。私はそういう人たちと一緒にお茶をするのが好きなんだぁ」
女神は何処からともなくバスケットと水筒を取り出した。
「よかったらこれどうぞー」
手渡されたのは熱い紅茶とカップケーキだった。
「い、いただきます」
カップケーキを一口食べてみる。とても苦い。抹茶味なんだけど物凄く苦い。なんなんだ、これ？
「このカップケーキ、とても苦いんですけど……」
「そう？　それは何か心がごちゃごちゃしちゃってるのかもしれないね」
「え？」
「私のカップケーキはね、少し変わってるんだぁ。心の中がまるで凪の時の海みたいな人が食べるとほんのり苦いんだ。抹茶味だから。でもね、心の中に嵐が来たような人が食べると物凄く苦くなるんだよ」
嵐……か。確かにそうかもしれない。何だか色々な感情がごちゃごちゃしている。
「ただ単に苦すぎるだけかもしれないけどね」

「いや……、そんなことないです。実は……」
　私は女神ー夕凪さんに心の中にあったことを話した。自分には天才の姉がいて、何をやっても全く敵わなかったこと。何とかして姉に追いつき追い越そうとしたがそれが出来ずに悩んでいたこと。そればかりかいつも姉と比べられていたこと。そして家の当主となった姉にかけられた言葉のこと。今日の親からの説教のこと。
　全部全部話しているうちに、涙が溢れて上手く喋れなくなってきた。そんな私を夕凪さんは何も言わずにただじっと見ていた。
「こんなことがいま、まで……、今まであっ……た、あったんで……す」
「そうか、貴方は今まで何とかしてお姉ちゃんを追い越そうとして努力してきたんだね」
「は……い」
「よく頑張ったね。辛かったね。誰にも相談しないで一人で悪戦苦闘してきたんだ。貴方は偉いよ。たった一人で何とかしようとすることは早々できるものじゃないからね」
「ゆ、うなぎ……さん」
　そのまま私は泣き出してしまった。夕凪さんはそんな私を抱きしめてくれた。
「どんどん吐き出して。貴方は十分努力してきた。ここで全部吐き出してもバチは当たらないから」

「どうかな。落ち着いた？」
「は、い」
　夕凪さんの服が涙でベタベタになってた。
「別にいーよー。このくらいー」
　元の間延びした口調でそう言った。
「すっかり暗くなっちゃったねー」
　ほんとだ。こりゃ親に怒られるな。
「帰りたくないけど、帰らないと……」
「帰っちゃうの？」

それじゃあと夕凪さんがランタンをブランコから下ろしてこう言った。
「送ってくよ」

家の門まで送ってもらった。
「入る前に少し待ってね」
夕凪さんがランタンを左手で頭の前にかざした。するとぼんやりと暖かい光が周りに広がっていった。
「これで大丈夫だよー」
何が大丈夫なのかよくわからないけど多分大丈夫だ。そんな気がする。
「今日はありがとうございました」
「どういたしまして。辛くなったらまたおいで。簪ちゃん」
「はい……、どうして私の名前を⁉?」
今思えば名乗ってなかった。
「女神様にはそのくらいのこと、お見通しなのだー」
そう言って、スーッと消えてしまった。
その後、家に入ったけど誰も遅く帰ってきたことを咎めなかった。大丈夫ってこういうことか。あの人、本当に女神なのかも。

「気が楽になってくれたならいいんだけどねぇ」
あの子の家を真上から見下ろす。
治めていた国を石もて追われて、あの公園に住み着いてかれこれ２０年近くになった。当然、女神なんて存在は誰も信じやしないからシェアエネルギーなんかない。だから今の私には大したことは出来ない。精々自分の能力でお菓子の材料を作り出したり、人の話を聞くことぐらいだ。
「本当にあれくらいのことしかできないからなぁ。女神なのに情けない話さ」

「そんなことないですよ」
「イストワール……」
　振り返ると本に乗った金髪の妖精ー私が国を追い出されたときについてきてくれた教祖のイストワールがいた。
「いつもなら5時には帰ってくるのに、3時間待っても帰ってこなかったから探したんですよ」
「ごめんよ。心配かけてさ……」
「いえ、いいです。夕凪さんが送っていたあの子、どうも色々とあなたと同じように抱え込み過ぎるせいかみたいですし。話を聞いてもらえたことで気が楽になったかもしれませんよ」
「そうだといいけどね。『モモ』のようにはいかないだろうな」
　そんなことを話しながら夜空を飛んで帰った。
　今、私ができる精一杯のことで、あの子の気が少しでも晴れていて欲しい。そう思い続けて。

気晴らし

最近、例の男性操縦者にタッグマッチ・トーナメントで相方になってほしいと何度も頼まれる。とてもじゃないが無理だ。彼に責任がないのは百も承知だが、何で自分の機体が開発中止にされた原因の人間と組まなきゃならないんだ。彼はそのことを知らないかもしれないが、私からしたらとてもじゃないが無理だ。

当然断ったが、それでもしつこく何度も頼んでくる。一応、理由も言ったが、それでも食い下がってくる。どうしたものか。

そもそも彼は何で私にあんなに頼んでくるのか。おかしい。彼のクラスには専用機持ちがかなりの数いたはず。何でわざわざ未完成の専用機を持っている私に声をかけてくるのか。あまりにも不自然だ。

一度、理由を問うてみたら私の専用機が見たいというまるで理由になっていないものだった。そんなことで組む相手を選ぶ筈がない。ただあの理由擬きも私に聞かれて咄嗟に出した答えだからおそらく本心ではない。彼はどんな理由で私と組みたがっているんだ。姉さんが裏から手を回している可能性も考えられなくはないが、そう考えるのは早計だ。じゃあ何で？そもそも彼は私が専用機を持っていないことを知っているのか。いや知らない筈。だから機体が見たいと言ったのかもしれない。本音に探らせるのもいいかもしれないけど、それこそ姉さんの介入を招くことになりかねない。

「考えていても仕方ないや。外に出よう」

気分転換に外出しよう。こんなこと考えてたんじゃ機体開発にも支障が出る。整備室や寮だとしつこく頼みに来られるかもしれないし、鬱陶しい気分にされたんじゃたまったもんじゃない。さてさてどこに行こうかな。

モノレールと電車を乗り継ぎ３０分、実家の近くの駅に降りる。
「えーっと確か公園は…こっちかな」
例の公園はそんなに離れていない。歩いてすぐに辿り着けるからいい。
「実家よりも実家らしいや」
気軽に帰れる場所という意味では、公園の方が実家よりもずっと居心地が良い。

「夕凪さんは…、あっ、いたいた」
ベンチの上で横になって昼寝していた。相変わらずの見窄らしい格好だったが、前と一つ違うところがあった。それは…。
「両腕がない…」
どういう訳か知らないが両方とも腕が無いのだ。右腕は肘から下がなく、左腕に至っては肩から下がなくなっている。
「何かあったのかな」
言葉が聞こえたのか夕凪さんが起きた。
「ん、あー、ありゃ、簪ちゃん、お久しぶり」

「久しぶりに来てくれたねー、ありがとう」
「いえいえ、それよりもその腕…」
夕凪さんは大したことじゃないようにこう言った。
「ああ、この腕のことー？此れはずっと前にねー、モンスターや他の女神と戦ってねー、無くしちゃったんだー。それ以来ねー、ずっと義手を付けてるんだよー」
とても壮絶な理由だった。どんな相手と戦っていたんだ、この人

は。
「今はイストワールが直してくれているから付けてないだけだよー」
　イストワールって聞いたことがない名前だ。
「あー、イストワールのことは言ってなかったねー。私の付き人みたいな人だと思ってー」
「付き人ですか…、信頼できる人なんですか…？」
「できるよー、仕事は遅いけど正確に仕上げてくれるしー、手先は私よりも器用だからー」
「いいなぁ…、私の場合、あんまり信用できないから…」
「ありゃ、付き人がいるってことはー、何処かのお嬢様なのかな？」
「まぁ、そんな所です」
「そっかー」
「でも…、前にも言った通り、実家には居づらいし実家と縁のある人間はあまり信用できないんです。私の付き人、本音って言うんですが、ちょっとね…」
「へぇー、何で？」
「親友なんですが、姉の差し金じゃないかと…、どうしても疑ってしまって…」
「ああ、なるほどねー。お姉さんとも面識があるんじゃ無理ないよねー」
「それで…、少し探ってもらいたいことがあっても頼みづらくって。姉さんに知られたくない内容ですから…」
「漏れちゃうと嫌だものねー」
「口は堅い方なんですが、姉さんと繋がっていたとしたら…、とどうしても警戒してしまうんです」
「それはそうだねー。他に頼りになりそうな人はいるのかな？」
「いないです…。夕凪さんくらいしか…」
「それはありがとう。頼ってもらえて嬉しいよ」
　間伸びしない口調でお礼を言う夕凪さんは少し嬉しそうだった。
「少し質問してもいいかな」
「何でしょう」

「こんなこと聞くのは何だけど、どういう内容を探ってもらおうとしたのか、差し支えなければ教えてもらえないかなぁ。耳打ちで」
耳打ちか…、それなら内容があまり漏れなさそう。
私は例の男性操縦者がしつこく誘ってくる理由を探ることを依頼しようと考えていることを教えた。
「あー、なるほどねー。なんか変だよねー。普通、そんな理由で誘おうとはしないよねー」
「やっぱりそうですか」
「多分だけど誰かに頼まれてるんじゃないかなー、お姉さんとかー」
「そ、その可能性だけはあって欲しくないです」
「そうだとしたらー、人のこと馬鹿にしているよー」
全くだ。

夕方になりイストワールという人が夕凪さんに義手を届けに来た。義手は何種類かあり、今取り付けたものは久しぶりに使うものらしい。3本指のアームにビーム砲なんて義手は、早々使い道無いだろうしなぁ。
「簪ちゃん。時間はまだ大丈夫？」
「少しなら大丈夫です」
「それじゃあ少しこの辺りを飛んでみる？気晴らしになるかもよ」
「そんなこと出来るんですか…、ＩＳも何も無いのに…」
「これくらいしか得意なことないのさ…、それと今日は力が戻ったから…」
そういうと夕凪さんが少しずつ姿を変えていく。くしゃくしゃの長い髪の毛は少し纏まった淡い青色の髪に変わり、服も腰にランタンを引っ掛けた空色のボディスーツへと変わっていく。最後に、虹彩の色が夕焼けのような淡いオレンジ色に変わり、白字のスタンバイシンボルが真ん中に灯った。絵画に見るような女神像とはまるで違うけど、とても綺麗だった。

「お待たせ、簪ちゃん。女神スカイハート、久々の降臨だ」
スカイハートさんの背に乗せられて夕焼け空を飛んだ。ＩＳとは違った感覚で新鮮だった。

「ここでいいかな？」
「モノレールの最終便に間に合えば大丈夫です」
あの後、モノレールの駅まで送ってもらった。何から何まで申し訳ない。
「またして欲しかったら言ってね。簪ちゃんが私を信じ続ける限り、いつでも出来るから」
そういって前みたいにスーッと姿を消した。
「少し気分転換にはなったなぁ…、さてと」
帰って機体開発に戻ろうっと…。

逃げることは決して悪いことじゃない

「機体作りまで手伝ってもらったから、なんか出来すぎているとは思ったけど…」

あまりにもしつこく頼んでくるので、私の機体の状態を見せて断ろうとしたら機体の開発を手伝うと言い出した。

それで整備科の上級生や本音を連れてきて機体の開発を手伝ってくれた。そのおかげで機体は完成した。これに関しては彼に感謝している。ただ問題はその後だ。

彼への御礼にと、抹茶のカップケーキを作って持って行ったら、彼の部屋から彼と姉さんが喋りながら出てきたのが見えた。咄嗟に角に隠れるとこんな言葉が聞こえた。

「私の機体データ、役に立ったでしょ？」

これを聞いた時、なんか納得した。やっぱり糸を引いていたのは、あんただったのかって。

「嫌な予感が的中しちゃったよ。やんなっちゃうなぁ」

馬鹿みたい。

大会までまだ数日あるから…、あそこに行こう。

「うわぁー、あの嫌な予感は当たってたんだー」

「えぇ、機体が完成したからいいけど…」

色々と理由を付けて外出して、夕凪さんに愚痴をこぼしに行った。流石にこれは吐き出さないと耐えられない。

「まあねー、機体作りのお手伝いをしてくれたその坊やに関しては責められそうにないねー、言い方悪いけど仕事を押し付けられたようなもんだからねー」

「押し付けられ…た？」

「そうそうー、本来ならばお姉さんがやんなきゃいけないことをねー、

彼が押し付けられたようなもんさー」
「嗚呼、なるほど…」
　言われてみればそうかもしれない。見る限りでは、彼は頼まれただけだしね。別に機体だって、彼自身の意思は関係ないし。
「尤もー、お姉さんは失言でそれすら出来なくしちゃったようだけどねー」
　まあ、「無能でいなさいな」と言っておいて、しれっと顔を合わせられるようなタイプじゃないしな、あの人。
「これを機会に仲直りしようとでも考えていたんでしょうか」
「さあねー、そればかりはわからない」
　あの人の真意は一体何なんだ……、そういえば。
「私の専用機なんですけどね…、未完成の機体を引き取るときに動かすのに必要なデータは一切渡してもらえなかったんです。機密保持だの何だの理由を付けられて。よく考えたら変なんですよね。機密保持が理由なら何で機体を引き渡すのかって…。あれだって本来、企業秘密が沢山詰まった物なのに…、何でデータだけ引き渡さなかったんでしょうか。被害妄想かもしれませんが、姉さんの介入があったのかもと考えてしまいます。自分が機体データを提供するからとか言って…。もしそうだとしたら私、とんだ道化ですよ。姉さんの掌で踊らされていただけのね…。馬鹿みたいに悩んで…、一人で頭を抱えて…。全部が全部、無駄だったとしか思えないです」
　本当に、ただの被害妄想かもしれない。でも今回あったことを考えるとこういうことがあったとも考えられる。そうだとしたら…、そうだとしたら…。
「前みたいに本当のことかどうかわからないから、こうとしか言えないけどね…」
　前みたいにぎゅっと私を抱きしめた夕凪さんがこう言った。
「そう考えちゃうのも仕方ないよ…、貴方はそれほどお姉さんのことが信じられなくなってるんだから…、やり方は他にもあったはずなのに…、貴方を傷つける手段しか選ばなかったんだから…」
　前みたいに泣いた。やっぱり耐え切れない。疲れた疲れた疲れた

疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた……。
「もうやだよ…、もう姉さんに追いつくとかどうでもいい…、これ以上したらもっと痛い目にあいそう…、辛い、痛い……、逃げたい…」
「それじゃあ、逃げ出してもいいと思うよー」
「えっ」
　思わず顔を上げた。
「何だか世の中は逃げることを悪いことみたいに考える人ばかりだけどさー、そんなことないよー。逃げないと心が死んじゃうことの方が多いからねー。死んじゃうくらいなら安全なところに居てゆっくり落ち着けばいいよー」
「そうでしょうか…」
「簪ちゃんが逃げ出したければ、私はその事にとやかく言うつもりはないよー。貴方が耐え切れないと思ったら、ゴーサインが出たようなものだからー」

「今日はありがとうございました…。ちょっと落ち着きました…」
「どうってことないよー、また来てねー」
　簪ちゃんが帰っていった…。うーむ、あそこまで追い詰められているとはねぇ。
「かなり重症のようですね」
「ああ、イストワール。来てたのかい」
「散歩がてら公園に立ち寄ったら、何だか声をかけない方が良さげだったので隠れてました」
「そうかい。イストワール、簪ちゃんの言ってることってあり得るかな？証拠がないからどうとも言えないけど、なんかありそうなんだよね」
「調べてみましょうか？」
「そうしてくれ」

イストワールを見送りつつ、コイーバを取り出して一服する。厄介なことになってないといいものだが、おそらく期待通りにはいかないだろう。

「さてと、私も少し外に出ましょうかね」

心の拠り所

公園の滑り台の上で佇んでいるとイストワールが来た。調査が終わったみたいだ。
「お疲れさん。イストワール。調べはついたかい」
「つきましたよ。倉持技研内には、必要なデータは全て揃ってました。そして何でデータが渡されなかったのかも…」
「流石だね、あなたは仕事が細かいよ。それで結果は案の定かい？」
「はい。あの子の被害妄想は妄想じゃなくて……現実です…」
「そうかい…、きっとあの子のお姉さん、焦り過ぎたんだろうね…。関係を何とか元に戻そうとはしたが、避けられているから取りつく島もない。それで多少強引にでも接点を作ろうとしたのかも…」
だとしてもやり方が酷過ぎたからなんとも言えないがね。
「どうしますか、この情報。私は見せない方がいいと思います」
「同感。そもそも探ること自体、不味いしね。それに2人の関係なんて部外者の私たちが安易に手を出していいことなんかじゃないしさ」
「そうですね。データは処分しておきましょう」
「そうしよう。さてと私は今日はここで寝るからイストワールは塒に帰っていいよ」
「分かりました」
イストワールが帰っていった。後姿を見送りつつ、私はコイーバを取り出して一服した。
「ほんと、やだねぇ…」

2日後、簪ちゃんが泣きながら駆け込んできた。何があったんだな、こりゃ。
「どうかしたのかな」
「聞いてください、実は…」
聞いたところによると、お姉さんの付き人に思い切って自分の考え

ているようなことがなかったかどうか聞いたらしい。そしたらドンピシャで当たってたんだとさ。その付き人さんも災難だねぇ。こんなこと教えられてさ、一体どうしろというのさ。
「本当に姉さんの掌で踊らされていただけなんて……、情けない話です」
「うーん、悪い形で当たっちゃったね…」
「機体作りに協力することで仲直りしたかったんでしょうか…。だとしてもこんな真似されたらたまったもんじゃないです」
「まぁ、そうだよね。そのせいで候補生向けの訓練や行事に参加出来なかったんだし」
「参加できるできない以前の問題ですよ…。機体データを外国の機体から流用したなんてどう説明すればいいのか…」
「外国の機体？どういうことかな？お姉さん、外国人？」
　国籍を移したということかな？基本的に誰にでもできることだし。
「姉さんはロシアの国家代表なんです…。なので姉さんの機体もロシアで開発されたもので…」
「へぇー」
　データを渡したって、それみようによっちゃスパイ行為でしょ。何てことしたんだ。妹のためにというのはわからなくはないが……、それでもやっていいことと悪いことがあるだろうに。
「バレると外交問題だねー」
「もうバレてるかもしれません…、あの学園にはテロリストが紛れ込んでいたことがありましたし、何度も外部からの攻撃を許しているし、扱っているもののわりに警備はザルなんです…」
　大丈夫かね、その学校？聞いている限りでは、なんだかとっても危ない場所なんだけど。

　一週間後、簪ちゃんが少々疲れた表情で報告しに来た。
　機体に関しては、国で回収することになったみたいだ。データを消

去し、倉持技研にて元々あったデータを改めて入力するらしい。
　それと簪ちゃんは一連の事件から専用機を持つ権利を放棄することにしたらしい。序でに代表候補生も辞めることになるらしい。ロシア政府からの追求があるかもしれないというのが表向きの理由だが、本人自身が色々と振り回されてやってられなくなったんだと。お姉さんがそれを聞いて血相変えて飛び込んできて思い留まるように説得したらしいが、突っぱねたんだと。かなり粘られたらしいが、ロシア政府にデータを流用したことをバラすと言って抑えつけたらしい。凄い手を使ったもんだ。本当にそんなことしたら自身の身も危ないのに…。
「まあ、これでゴタゴタは収まりました…。多分、専用機や代表候補生の座に手を出し続けている限り、姉さんの干渉は続くと思いますし…。これで良かったと思います。未練がないわけではないですけど…、姉さんからお節介をかけられるのはもう嫌ですから…」
　ちょっと悲しそうだが、鬱陶しいものがなくなって吹っ切れたみたいだ。
「少し飛ぼうかー？気晴らしにー」
「それじゃお願いします」
　再び簪ちゃんを背負い、空を飛ぶ。
　随分静かなので後ろを見ると背中でぐっすり寝ていた。大分ストレスが溜まっていたのだろう。
「お疲れ様。いい夢見なよ…」
　背中を寝床に提供するくらい安いものさ。

「簪さん、大分、お疲れのようでしたね」
「ありゃ相当苦労したみたいだからね。まぁ、ストレス源から離れられるのだからいいのかもしれないね。未練はあるようだけど…」
「それに関してはどうしようもないですね。私達はここでは何の力もありませんし」

「まぁ、そうだねぇ」
　イストワールとブランデーの水割りを飲んで話をする。公園ではなく、別の場所にある塒でだ。公園だと見た目が見た目なので、何かあると面倒くさいことになる。だから塒に篭っている。
「かと言ってゲイムギョウ界に帰ったって、私を追い出した連中が望んだ女神が統治しているから結果は同じさ…」
「すみません…、やはりあの時…」
「やめておくれよ。イストワールに育てられたとはいえ、他所の次元の女神メモリー呑み込んだだけの捨て子じゃ、潰れかけの国を存続させる為の苦肉の策だったとはいえ、いい顔されないもんさ…。誰も望んでないもの…。その結果、本来の女神が生まれて国が持ったんだから、良しとしようよ…。それよりもイストワール」
「何ですか」
「…いや、何でもない…。今日は一緒に寝てくれないかな。悪いけど…。私も少し疲れたから…」
「いいですよ…」
「その前に少し抱きしめてくれない…」
「どうぞ」
　イストワールの胸に飛び込んだ。後ろから小さな腕が私の頭を抱きしめてくれた。
「やっぱり落ち着くよ、イストワール。いや、お母さん。プラネテューヌに居た時からやめられないんだ…」
「あの時とは違って、貴方を消そうとするものはもうないですが…、安心してもらえたなら嬉しいです…。お休み、夕凪……いや、エリル」
　そう言いながらイストワールは私の頭を撫でくれた。ありがとう、お母さん…。
　その感触に私は心地良さを感じながら、そのまま寝てしまった。

本音

今日も特にやることがなく、のんびりとブランコを漕いで遊んでいた。国にいた頃とは大違いだ。あのボンクラのせいで休む間もなく駆けずり回っていた頃と比べて、本当にゆっくりできる。それにシェアの質も簪ちゃん一人で、十分に良質なものが取れるからプラネテューヌよりも状況はいい。

「心身共に充足していることのなんといいことかー」

女神になって良かったと思ったのが、国を追い出されてからなんて私ぐらいだろうな。序でに用済み扱いされたのも。

それにしてもこんな日常がなんと心地よいことか。今の私の名前みたいに、波風立たない穏やかな日々…。

今日は簪ちゃんは来ないのかな。いや来たくないんだろうねぇ。誰かいるもの。イストワールではないね。人間だ。それにこっちの様子を伺っている。出てこないということは、多分私のことを警戒しているのだろう。こんなホームレスを目立たないように見ている時点でおかしい。前に襲ってきた学生なんか何の警戒もせず近づいてきたからなぁ。

「隠れているのはどなた?出ておいで」

ブランコに乗ったまま呼びかける。しかし私を見ていた人は何処かに行ってしまった。自分から言っておきながらなんだが、出ておいでと言われて出て来るほど迂闊な人間もないものだ。

「暇な人がいるものだね…」

私ほどではないようだけど。

それから3日に1度の割合でこんなことが起こった。
最初は気にしてはいなかったが、2週間くらいして流石に気持ちが悪くなってきたので、イストワールに協力してもらった。といっても大したことじゃない。身体を見えなくして見張っている奴をひっ捕らえてもらっただけだ。妙なやつは大体同じ位置にいる。というのもこの公園には、あまり隠れられる場所がないからだ。
それでイストワールが腕から射出したワイヤーに繋てそいつを連れてきた。その正体は、簪ちゃんと昔ここで遊んでいた子だった。名前はなんていったかな。
「あなた、名前は？」
「…布仏…本音…」
「本音…、はて、どこかで聞いたような？」
「夕凪さん、簪さんの付き人の方だと思いますよ」
「あー、そういえばあの子、自分にも付き人がいるといってたね」
しかしその付き人の子が何故またこんなことを？大体予想はつくが聞いておこう。
「それで何でこんなことをしていたのかな？」
「かんちゃんが苦労して取った代表候補生の地位と開発中の専用機を……、国の命令とはいえあっさり手放したことが……、納得できなかったから……、それで……」
「原因を探っていたということかな」
本音という子はコクリと頷いた。
「家の人にも協力してもらって、かんちゃんの動向を探っていたんだ。それで…」
「私達に行き着いたと…」
「は…い」
「なるほどねぇ…」
この子の頭の中を覗いてみたら機体開発を手伝っていたってあるし。そりゃ気になるわな。あの子が悪戦苦闘して機体を作ろうとし

たのも知っていたようだから。疑問に思うのも無理はない。ただ……。
「調べてどうする気だったの？」
「それは……、その…」
口を噤んでしまった。当たり前といえば当たり前か。こんなこと聞かれて口を開く奴はそういないだろうし。ならば……
「言いたくないのならいいよ。もうこんなことしないでね」
相手も拍子抜けしたようだ。こんなにあっさりと解放されるとは、思ってもみなかったのだろう。
「どうしたの？行っていいよ」
その子は頭を下げて、公園から出て行った。
「解放してよろしかったのですか」
「かまわん。用件は頭の中を覗いて確認したから」
「成る程…、それで理由はどうでした」
「単純に理由が気になったのと簪ちゃんのお姉さんからの命令みたいだね」
「そうでしたか…、やはりあのような幕引きでは納得しない人もいるのですね。簪さんは、一応納得していたのですから、そっとして置いた方がいいでしょうに…」
イストワールの言う通り、外野がとやかくいうことではない。
「それでも気になった人がいるんだろうね。誰かに入れ知恵されたんじゃないかと。でもあれはあくまで簪ちゃんが自ら選んだ選択肢だよ。私は単に話を聞いていた。それだけさ…」

「さて…」
探りを入れられたとなると、そろそろ頃合いだろうか。
「よその街に行方をくらませるか…」
「その方がいいかもしれません。簪さんには申し訳ないですが、あま

りいいことではないですから…」
「そうだね…」
　コートからすっと鉄扇を取り出して扇ぐ。
「しかし当分になるか、永遠になるか…。後者にはなって欲しくはないものだね…」
　そうなったらあの子を支える柱がなくなるも同然だから。

Ｗｈｏ☒ｓ　ｔｈａｔ　ｇｉｒｌ　？

夜の公園でランタンの蝋燭に火を灯す。そしてプラネテューヌから持ってきたラジオの電源を入れる。
ラジオから流れてくるジャズに耳を傾けつつ、紫煙を燻らせる。海の向こうでは朝なのだろうか。おはようだのなんだの言っている。いつもならＡＭや外国のラジオを聴いているけど、今日は違う。
「えーと、確かこの周波数だよね」
簪ちゃんが好きなアニメの関連番組がＦＭのこの局でしているらしい。だから数ヶ月ぶりにチューニングする。やっぱり音質はいい。
時間を見るとそろそろ始まりそうだ。さて……。
ランタンの火を消してこう話しかける。
「そこにいないで、一緒に聴かないか？居るのだろう、本音さん」
木の陰に隠れてこの前のあの子が私を見ていた。さてさて今度は何の用かな。

「や、やっぱりバレちゃってたよー」
たてなっちゃんから監視を続行するように命令されたから見張っていたけど、簡単に見つかってしまった。前みたいに取り押さえられることはないけど、こっちを見ていて私のいる方においでおいでと手招きしている。
「どうしたの、早くおいで」
かんちゃんと同じ声で話しかけてくる。ただかんちゃんと違って、なんだか怖い。暗くてあの人の顔がよく見えないのもあるけど…。迂闊に近づいちゃいけない気がする。
「じれったいなぁ。こっちにおいで」
掌を上に向けて、手招きをした。するとすーっとあの人のいる所に引っ張られていく。
「わわわわ…」

咄嗟に木の幹に掴まろうとしたけど無理だった。一気に強い力で引っ張られてベンチに座らされてしまった。なんなんだろう、この人。
「まあ、怖がりなさんな。とって食おうなんてせんからさ」

「それで、私に何か御用？」
あの人が葉巻をふかしながら私に質問してきた。
「大体わかるがね。簪ちゃんのお姉さんに命令されて監視を続行したとか…」
素直に頷く。多分、この人には隠し事は通用しない。
私が頷いたのを見て困った顔をしてこんなことを言った。
「貴女にこんなことを言っても何にもならんが…、そんなことをされては、あの子が来たくても来られないよ。ただでさえお姉さんの干渉を嫌がっているし。お姉さんになんとかそう伝えてもらえないかな」
「そうしたいけど…、たてなっちゃんが簡単に聞いてくれるかどうか…」
「難しいのかい」
「はい…、たてなっちゃん…、貴方があの時のことで…、かんちゃんに入れ知恵したんじゃないかと…、疑っていて…」
「あの時のこと…、あの子が専用機と候補生の地位を放棄したことかな」
「そう、それ…。あんなに苦労して手に入れたものを、あっさり捨ててしまったから」
「確かに不審がるのも無理ないが…、あれは本当に簪ちゃん本人が決めた事だしなぁ」
そう言って残っていた葉巻に火をつけて、紫煙を燻らせた。よく吸う人だ。
「そもそもねぇ、私がそんなことしたところで、何の意味もないんだ。

私自身、他の代表候補生とは縁もゆかりもないし。もしそうなら今回みたいに機体そのものが、御蔵入りになるようなことを止めようとするだろうさ。上手くいけば、濡れ手に粟で苦労せずに専用機が手に入れられるのだから」
「それは…、確かに…」
「まぁ、それよりもね。本音さん…」
ベンチからスッと立ち上がって、あの人はこう言った。
「自省することも必要だと、簪ちゃんのお姉さんに伝えておくれ。人を疑うのも大事なことだ。しかしながら自分に何か落ち度がなかったか、と自分の行動も見直されてはいかがか、とね」
「は、はい…」
「それじゃあ、これで失礼。夜遅いから気をつけて。ああ、それともう一つ。命令に従うのもいいが、やり過ぎると取り返しがつかなくなるよ」
そのまま歩いて、トイレに入っていった。
その後、２０分しても出てこないから見に行くと居なかった。一体あの人は何者なんだろう。
「さあてね」

「まあ、あの子は早めに手を打てば、簪ちゃんのお姉さんみたく痛い目を見ないで済むかもねー」
さてさて野暮用も済んだことだし、引っ越し作業に戻るとするか。
塒に戻るとイストワールが荷造りをひと段落させて一服していた。
「ああ、夕凪さん。お帰りなさい」
「イストワール。荷物はこれで全部？」
「全部です。あとは目的地に跳ばすだけですね」
「あんがとさん」
「いえいえ」

そう言いながら煙管で一服しているイストワール。見てくれからは信じられんが、割と喫ってるんだよね。酒もかなり強いし。
「その煙管、大事に使ってくれているんだ。ありがとう」
「使いやすいですから」
私もつられてコイーバを取り出して、ナイフで先を切り落として火を点け、口に咥える。
月明かりに照らされながら、２人で紫煙を燻らせた。

プレゼント

道具箱から色々器具を取り出して機械いじり。久々に義手の修理以外でこういう事をする。

「えっと、確か部品は…、あったあった、これだ」

簪ちゃんがそろそろ誕生日らしいからね。そのプレゼントを作ろうと思って塒でせっせと作業する。

あの子が見たテレビアニメのロボットを、一つ組み上げて渡してみようかと。無論、ロボットと言ったって手で抱えられる小さなやつだ。寮暮らしならその方が良いだろう。駅前や観光スポットで見かけるような大きな物を渡したって、喜ぶかもしれないが置き場所ないしね。そもそもそんなもの作るお金も無いし。

「あのテレビまんがは、私もみたことあるしね。イストワールを修復した時に余った部品で、1号機を作ったら思いの外、良いものができたんだよな」

息抜きで見たものが、意外なところで役に立った。一時の娯楽に過ぎないと思っていたのに、何が起きるかわからないものである。

1週間かかってようやく完成した。もう誕生日当日だ。テストしたらまともに動いた。これで良し。後は届けに行くだけだ。

「イストワール。プレゼントは何か用意したかい」

「はい。問屋でお茶を」

「あの子もたまに抹茶のカップケーキ作るからね。中々いい選択じゃないか」

「では、行きましょう」

あの子のいる学校の最寄駅までゆっくりと歩いて行った。

「さてさてモノレールなんて久しぶりに乗るねえ。しかしこれ以外に交通手段がないのも不便なもんだ」

見ていて不思議に感じたのだが、何であんな所に学校なんか建てたんだろう。もしもの時、例えば地震にあったときとか孤立してしまわないか。船はあるだろうけど、壊れてたら何にもならんだろうに。
「まぁ、妙な連中が入り込めないようにしているのかもしれませんよ。海の上ならそういうことは難しいでしょうから。尤も簪さんのお話を聞く限り、役に立っているのかは非常に疑わしいですけどね」
「全くだ」
モノレールは海の上を学園目指して進んでいく。

「あの男の子のおかげで、受付がどこかわかったのはめっけもんだね」
「結構入り組んでいるようですからね。それにしても、あの人でしょうか。簪さんの機体開発を手伝ったのは…」
「多分そうだろう。この学校、男子生徒1人だけみたいだよ。パンフレットに書いてある。おそらくあの子だろう」
どうでもいいが、女の子を結構連れていたな。あれじゃ両手に華というよりむしろ花電車だ。尤も彼にはその気がないようだが。
受付で要件を説明し、寮監さんにも話を付けてもらった。訳を話すとあっさりと通してくれた。まぁ、プレゼント渡しに来た人間に渋い顔するような野暮な人ではなさそうだったし良かった。

「簪ちゃん、誕生日おめでとうー。これー、プレゼントー」
「私からもです」
2人でそれぞれのプレゼントを渡す。
イストワールは小さな箱、私は少し大きな箱を渡す。
「これなんですか？少し重たいです…」
「簪ちゃんの知ってるものー。ちょっと古いものだけどねー」
古いものなのは間違ってないし。
「こんなに大きな物、ありがとうございます」

「いいのいいのー。こんな形だけどねー、これくらいのことをする余裕はあるからー」
「そうなんですか…」
暫くお喋りをする。久しぶりに会ったから会話も弾んだ。
気がつくとそろそろ5時だ。そろそろ切り上げた方が良かろう。
「もうそろそろ切り上げようか…、名残惜しいが…」
「はい、また今度の日曜日に…」

簪ちゃんが談話室を出て行った。あの子の気配が向こうに行ったのを察知して、徐ろに口を開いた。
「遠くで私達のことを見ているこの子のお姉さんらしき人。あんましやり過ぎるとますますこの子の心が離れてしまうよ」
どっかから見てるみたいだし、忠告はしていこう。
「そんじゃ、バーイ」
私も談話室から出て帰った。流石に消えるような真似はしない。危ないから。
簪ちゃんはあれを喜んでくれるかな。

「中身は何だろう?」
いーすんさんが渡してくれた箱は、抹茶と緑茶の缶だった。かなりいいやつだ。抹茶ケーキ用とお茶用かな。お茶請け用のぼた餅も一緒に入ってる。夕凪さんとイストワールさんの手製だろう。
「ぼた餅ねぇ。緑茶には合ってるね」
甘いものが手に入るのは嬉しい。
「さて、こっちの大きい箱はと……、えっ⁉?こ、これは!」
大きな箱の中には緑色のボールみたいなものが入っていた。でもこれはボールじゃない。これは…☒
「カンザシ、ゲンキカ?ゲンキカ?」

ハロだ！何でハロが☒
取り出してみるとずっしりと重い。ドッジボールくらいの大きさはある。床に置くとそこらへんを転がり出した。そしてポーンと跳ねた。
「ハロ、ゲンキ、ハロ、ゲンキ」
「本当に元気いっぱいだね」
まさかハロがもらえるとは思わなかった。これはとても嬉しい。アニメのロボットと寸分違わぬものが貰えるとは…。
しかしあの人、よくハロなんて知ってたなぁ。

お姉さんとて同じ事

「えっ…、ここにはいられなくなったって…」
　驚いた顔をしている簪ちゃん。そりゃそうだ。いきなりいなくなるなんて言い出すとは思わなかっただろうし。
「言いにくいことなんだけど、実は…」
　引き払うことになった理由を、簪ちゃんに説明する。
「ああ…、やっぱり姉さんや本音がなんかやってたんですね…。最近、本音が生徒会室によく行ったり、外出するのを見かけていたんです。何かあるなと思っていたけど…、まさかストーカー紛いのことをやっていたなんて…」
　どうも簪ちゃんも薄々感づいていたらしい。どうしたものかと頭を抱えている。
「ただずっと遠くに行く訳じゃない。いつか戻ってくることもあるだろうさ」
「本当ですか？」
「生きてさえいればね」
「生きていて下さいよ。私は夕凪さんを頼りにしてるんだもの。もし何かあったら…」
「大丈夫だよ」
　よしよしと背中をさする。ちょっとでも安心させておかないと。

「ちょっと姉さんに文句を言ってきますよ。流石にこれは…」
「そうか…。やめてもらえたら、それに越したことは無いからねぇ」
　簪ちゃんが帰っていく。
「そうだ、簪ちゃんー。行く方角は教えてあげるよー。西だー」
「西ですねー」
「そうそうー。またなんかの折に会うかもよー」
　公園の端と真ん中で声の掛け合い。これではまるで明日遊ぶ約束

をする子供みたいだ。しかしそういう子供と違うのは、いつ会えるのかわからないことだ。私達は少なくともこの子のお姉さんのちょっかいが収まらん限りは、簡単には会いにいけんだろうし。
しかしながら、簪ちゃんのお姉さん。妹がどんな人と会っているのか気になるのはわかる。得体の知れない相手なら尚更だ。とはいえ……、
「妹との関係修復の手段を破壊した張本人と疑うことはないでしょ…」
この前、捕まえた本音とかいう子の話から察するに、お姉さんは私をそういう風に見ている可能性がある。無論そうじゃない可能性もあるが…。ただ落ち着いて考えれば、原因が自己の失策であることに容易に気づくはずだからなぁ。
「まぁ、逆恨みして襲ってくるようなことはあるまい」
仮にもロシアの国家代表と生徒会長している人なのだ。そんな事をしたらえらいことになるくらいわかっている筈だ。
しかしそうはいかないかもしれない。それは簡単だ。
「ＩＳ学園にいる一部の国家代表候補生の素行が良くないという話は聞いているんだよね。ＩＳを無断展開して暴れているなんてこともあるらしいし」
よく問題にならんと思うよ。私はＩＳのことはよく知らないから何とも言えないけど、ルールくらい守れんもんだろうか。
簪ちゃんのお姉さんがそんな人ではない事を祈りたいものだ。まあ、あの子のお姉さんだ。昔の姿しか見たことはないから、どんな人かは知らない。ただ、ＩＳを使って襲いかかるような真似はせんだろう。そんな事をしたらただじゃ済まないのは勿論だが、それ以上にお姉さんにとって避けたいことが現実になってしまうからだ。
「妹の柱になっている人を攻撃したらどうなるか。それがわからない人ではないだろう。何せ…」
あの人にとっても、簪ちゃんが大事な存在であることには変わりないからだ。

ブランコ問答

霧が立ち込める夜明け前の公園でゆっくりとブランコを漕ぐ。この時間なら子供達に遠慮することなくこういうこともできる。ゲーム全盛期の今でも外で遊ぶ子供はちゃんといる。ゲイムギョウ界の女神だった私がこんなこと言うのもなんだが、外で遊べるうちに遊んだ方がいいだろう。ゲームなんて大人になってからでもできる。

「おや……？こんな朝早くに…」

霧の向こうから誰かが歩いてきている。まだ４時くらいだ。こんな時間にここに来る人間はそう多くはない。精々、巡回中の警察官や散歩に来ている近所の人くらいだ。大体の人の気配は知っているが、その誰でもない。いったい誰だ？

一応のこともあるから内ポケットにしまってある鉄扇を取り出す。前にホームレス狩りの悪餓鬼共が襲ってきたことがあったからね。とっとと返り討ちにして、知り合いのお巡りさんに突き出したけど。必要以上に傷つけんようにするの大変だったよ。

「さぁて、鬼が出るか蛇が出るか」

少し警戒していると、容姿が見えてきた。

癖のある水色の髪と紅い眼。随分と疲れきった顔をしている。服装は茶色いコートとベストのような制服、ありゃ簪ちゃんの学校の制服だね。あの学校、制服の改造もできるのか。

「隣、良いかしら…」

その人は隣のブランコに腰掛ける。そしてゆっくりと漕ぎ出す。ただそれだけ。

別に声を掛けるようなことはしない。相手が話し出すのを待つ。そうしないと相手が考えていることを引き出せないものだ。

「ねぇ、貴方が…、簪ちゃんの新しい友達…？」

頷く。別に間違いではない。

こんな事を聞くってことは、おそらく簪ちゃんのお姉さんで間違いないだろう。昔見たことのある顔だ。
「そう…、ところで、一つ聞きたいことがあるのだけど、良いかしら…？」
「何か？」
「簪ちゃんのことなんだけど…」
「簪ちゃんのこと」
「あの子、なんで…、あっさりと…、手に入れたもの…、捨てられたのかしら…」
「さあてね、それは、そればかりは、簪ちゃんの胸の内を覗き込まないと分かりません。あの子のことですからね」
「貴女が何かしたわけじゃなくて…？」
「何かしたか…？そうですねえ…。強いて言えば、あの子の話を聞いていただけですよ。私に出来る最大限のこと。ただただ話を聞いただけですよ」
「まさか…、そんなことくらいであの子があんな事するなんて」
納得いかないようだ。このお嬢さんは。仕方のない話ではある。こういう拍子抜けするくらい単純な事ほど、人間にとっては信じがたい話なのである。
「嘘かどうか疑うのなら簪さんに聞いてごらんなさい」
「それが出来れば苦労しないわよ！」
おやおや、逆鱗に触れてしまったようだ。危ない危ない。
「なぜ出来ないのです？」
「それは…、あの子に避けられているからで…」
「どうして避けられているんですか」
「それは、あの時の私の言葉が…」
「言葉？」
「貴女は何もしなくていい。無能でいなさいなってことを」
「成る程、避けられて当然ですね」
「そんなことわかってる」
「そうですか」

わかっているならいい。結論を出させる手間が省ける。
「ひとつ質問を。どのような状況下でその言葉を投げかけられたのか」
「私が家を継いで、当主になったとき」
「御当主になったとき。重ねて質問を。何故そんな言葉を投げかける必要があったのか」
「それは私の家は、命に関わるような稼業をしているから」
「あの子はそれをご存知か」
「当然よ。基礎訓練は受けているから」
「貴女の真意が、あの子に理解してもらえるものと思っていたのか」
「ええ」
「今は」
「ないわ」
「関係修復は図ったか」
「色々試したわ。誕生日にプレゼントを贈ったり、データを密かに送ろうとしたり」
「努力はした、と」
色々やるだけやったようだ。しかし意味ないだろうな。拒絶反応を起こすような相手に、近寄ろうとする人間が何処にいる。イカアレルギーの人間が、無理にでもイカを食べようとはしないのと同じ理屈だ。
「ええそうよ。でも無理だった。そこで考えたのが、専用機のデータ流用よ」
「後先考えましたか？」
「後先？」
「外国製の機体データなぞ国家機密でしょう。そんなもの使ったらどうなるかくらい分からなかったんですか」
「全く。何かあってもどうとでも手を打つつもりだったわ」
「どうとでも…ねぇ」
この子の家が何をしているのかは知らないが、そうそう上手くことが運ぶものか。それこそ妹を危険に引き込むことになるだろうに。

どうも肝心なところで詰めが甘いな、この人。優秀ではあるらしいが、それがかえってこういう見過ごせない穴を開けているのやもしれん。

先っぽを切り落としたコイーバに火を点けながら、わたしはそう推察した。

「実際のところは、危険な状況を招く前に、簪さんが真相に気づき事なきを得た」

「危険な状況なんて…」

「まぁ、何にせよ、イチャモンつけられるものを妹さんが使わずに済んだんだから良しとしたらどうです」

「良しとしたらって…、でもそれじゃあ私がしたことって…」

「さあてね。まあ、とんでもないレベルでやり方を間違えて、妹さんとの関係修復がますます難しくなってしまったのは事実ですね」

まぁ、無理に修復させんでもいいだろう。

「なんとか修復させる方法は無いものかしら」

「身の回りの人に聞いてみたらどうですか。私よりも」

「貴女から説得してもらえないかしら」

「簪さんの信頼を損ねることになるからお断りします。貴女との繋がりがないことが、彼女に信頼されている理由ですから」

「そっか…」

当てが外れたようだが、簪ちゃんとの関係を持続させるにはこの人の頼みを聞くわけにはいかない。そもそもだ。他所の家の姉妹関係の修復に、何で私が手を貸さなきゃならないんだ。双方がそれを望むのなら兎も角、あの子は別段そうは言ってない。無理にそんなことしても仲直りなんかできやしないのだ。無益なことはしたくない。

「時間取らせちゃったわね…、それじゃ」

「やーれやれ、終わったね…」

何だったんだ、この問答は。まぁどうでもいいがね。

「イストワール、聴いてたかい？」

「はい…、何とも言えないですね。お姉さんの方は、仲直りすることに積極的なようですが…」
　通信機の向こうからイストワールが答える。
「簪さんは今のところそうでもないようですからね…」
「あれだけ振り回されたら誰だってそんなこと思わん」
「私でも無理だと思います」
　まぁ、簪ちゃんがどうしたいかが噛み合わないと仲直りすることは出来ん。双方がそう考えんとどうにもならないのは、人間同士でも国同士でも古来より変わらない。
「さてと、そろそろ私もそちらに向かうよ…」
　ブランコを大きく揺らして、飛び降りる。落し物がないか確認して公園の出口へと足を進める。
「さあて、ここへ帰るのはいつになるか…」
　帰る前に公園がなくなっているかもしれんが…。
　そんなことを考えつつ、私は公園から出て行った。

京都

公園から歩いて9日目、甲信越と北陸経由であちこち見て歩きながら、東山トンネルを通って上洛。遠回りだけど、これから暖かいところに行くんだから少しは寒いところに行ってみたいもの。まだ雪は降っていなかったがね。時期を考えれば当たり前だが。

それはさておき久しぶりに来た京都。そろそろ紅葉の時期か。とはいえカエデの色が大して色が変わっているような気はしないのだが。

「まあいい。久々の京見物としゃれこみましょうかね…」

「おいおい…、こんなものまであるのか…。縁結びとかいうけどさ…」

適当にほっつき歩いていると何やら学生が集まっている神社がある。縁結びの効果があるとかいう場所らしい。なるほど確かに若い子には人気があってもおかしくない。しかし一ついただけないものがある。

何なのさ、このデカデカと恋と書いた柄杓は…。御守りくらいにしときなさいよ。こんな目立つの…。

興醒めなので、さっさと出た。何だかねぇ。

神社を出て、イストワールとの合流場所である三十三間堂に向かうことにした。多少の寄り道をしながら。

三十三間堂まではそう時間はかからんからゆるゆる行く。

東福寺駅の前を通り、細い道を行く。此処を進んだ先に行きたい場所があるんだ。

「確かこの辺りに…」

お目当てのものがあった、あった…。跨線橋。少々新しくなってい

るが、列車はよく見えるみたいだ。良かった良かった。
カメラを持って撮影している人もいる。やはり撮影場所としてはいい場所なのだろう。車と名の付くものは絶対にこないから。
私もカメラを持っていれば、写真の一つや二つは撮っていただろう。でも今は持っていないし、何よりいらない。目に焼き付けておけば、余程のことがない限り、いつでも思い出せるし消えることもないのだから。
「さて、もういいかな…」
イストワールが待っている。これくらいにしよう。
あんまり目に焼き付けても、目が焦げたトーストになるだけだし。それはごめんだから。

「遅かったじゃないですか」
「ごめんよ、イストワール。久しぶりに来たものだから」
三十三間堂でイストワールと合流した。待ち草臥れたのか機嫌が悪かった。少しあちこちウロウロしすぎたか。
「まあいいですよ。夕凪さんの記憶通りでしたか？」
「それはないよ。あちこち違う。尤も跨線橋だけは、同じだったがね」
そんな他愛もないことを話しながら、鴨川沿いを歩いていく。
「ところでイストワール。あそこは住みやすそうかな？」
「大丈夫ですよ。海沿いで暖かい所ですし」
「そりゃ良かった。さてとこれから何処に行こうかな」
「取り敢えずあちこち見て回りましょうよ。私も何処にいくのか、特に決めてはいませんから」
「そうしようか」
イストワールと合流しても、やることは結局変わらなかった。

「あれ？」
「どしたの、イストワール」
「あそこにいるの簪さんじゃないですか？」
　イストワールが指差す方向に、確かに簪ちゃんがいた。何だってこんなところにいるのやら。まあ、あの子と似たような制服の子をあちこちで見かけたことを考えると多分学校行事だろう。学年を考えると修学旅行では無いと思うが、学校によっては1年生でやるところもあるのかもしれん。
「学校行事だろうね。どういうわけか知らんが、ここは修学旅行生がよく来る場所だしね」
「そういえば学生さんの姿が多いですね。私もあちこちで見かけました」
　そうこう話をしていると簪ちゃんに見つかってしまった。随分驚いていた。それはそうだろう。西に行くとは聞いていても、何処に行くのかは教えていなかったのだから。

　近くの喫茶店でお茶をする。コーヒー代くらい持ってるさ。
「目的地って、ここだったんですか」
「いやいや、もっとねー、あったかくてー、海が見えるところー」
　京都でも悪くはないが、冬が寒い。だからもっと西の暖かい所に行く。
「着いたら葉書でも送るよー」
「お願いしますよ」
「ところで簪さん。此処へはどんな用事で」
「ああ、いーすんさん。修学旅行ですよ」
「一年生であるんですか。どこの学校でも行くのは二年生だとばかり思ってましたよ」
「同感」
　一年生のうちにやるところなんてそう多くはないだろう。

「どうかなー。あちこち見て回れたー？」
「どこもかしこも人だらけでしたけど、それなりには…」
「そりゃー、良かった」
まあ1人でも楽しめてるのなら良いことさ。集団であちこち行くばかりが能じゃない。

四条辺りを簪ちゃんとともにぶらつき、その後は集合場所の清水寺まで送ってあげた。
「それじゃ簪ちゃん。またいつか…おっと忘れるとこだった、これ」
紙に書いたアドレスをわたす。
「イストワールへの連絡手段。いざという時のために。聞くところによると行事ごとに、なんかあるらしいからさ」
「ど、どうも」
「まあ、何も起こらないにこした事はないが…、一応ね」
「それでは」
手を振って別れた。

イストワール

四条大橋の辺りを歩いていると急に身体が震え出しました。熱や病気の類ではありません。通信が入ってきました。簪さんからです。

「あば、あばばばば…」

「ありゃ、何かあったか。イストワール、下へ降りるよ」

夕凪さんに連れられて、橋の下の道に降りました。流石に目立つので。

「それで、何があった?」

「簪さんの乗っているモノレールが暴走しているらしいんです」

「モノレール?京都にそんなものあったかな?それはともかく運転士に何かあったわけじゃないのか」

「ちょっと待ってください…、簪さん、モノレールは無人運転ですか?」

「無人です!コンピュータ制御で…」

音声が途切れてしまいました。これは不味いですね。直ぐにでも現場に向かった方が良さそうです。

「夕凪さん。私、少し様子を見てきます」

「はいな。私は根っこを叩いてくる。もしかしたらあれを使うかもしれん。その事は頭に入れておいて」

「無茶苦茶なことを考えないでくださいよ。私が巻き添えを食った事だってあるんですから」

「わかってるって」

夕凪さんは一気に駆け出して、女神化して飛んで行きましたそういえばあの人は他の女神と違って、姿を隠せるんですよね。便利です。私も同じですが。

「さてと、私も準備した方が良さそうです…」

本を清水寺の方向に飛ばしつつ、電子戦用の準備をします。腕は多めにしますかね。

さてとモノレールは、ありましたね。かなりの速さで走行中のようです。早いこと取り付かないといけませんね。
本の表紙からマグネットアンカーを射出して、車体に取り付きます。進行方向からして2両目に取り付くことが出来たみたいです。
「簪さん、モノレールに取り付きました。今の状況は?」
「制御が完全に乗っ取られています!今、侵入された痕跡を探っています」
「分かりました。それでは私も尻尾を掴むことにします」
円状のパネルを展開して、制御系にアクセスします。こういうことなら私もそこそこ動けますから。前に修復された時、ＯＳを新調してもらいましたし。
「いざという時は、マシンジャックを使いましょう…」

「さてさて、大体痕跡は掴めてきました。簪さんにデータを送って…」
「いーすんさん!大変です!このモノレールに時限爆弾が!」
「爆弾ですか!タイマーは☒」
「残り１２分です!おまけに高熱原体も接近しています!」
何なんでしょうかね。この学校。疫病神にでも取り憑かれているのでしょうか。
「爆弾は、私が何とかします!簪さんは制御系を取り戻してください!」
「了解!」
作業用のアームを背中から展開して爆弾探知にあたります。
「爆弾となると急がないと。何かの拍子にタイマーが早まったり、故障したりすれば、乗客の人達はおしまいです」
伸縮式のアームを使い、あちこち探ってみることにしましょう。こ

んな時でも冷静に。焦りは禁物です。

「拍子抜けしてしまいました。こんなところにあったなんて…」
まさか車体の上にあるとは。しかもサブアームを使って持ち上げたら、簡単に取れる場所にあるとは思いませんでした。
他に爆弾はないようです。さっさと空中に持っていかないと。ところで、
「高熱原体の方は大丈夫ですか？」
「そっちは、例の彼が押さえています！」
「分かりました！簪さん、爆弾は取り外しました。これからどこかに捨ててきます！」
「ありがとうございます！」
アンカーを切り離し、モノレールから離れます。
さて放り投げてもいいのですが、それだと何処かに残ったままになる可能性もあります。ならば……、
「こういう時に古くなったものは役に立ちますね…」
古いアームに爆弾を括り付けて射出します。そしてこれを……、フィンガースナップをして爆破させます。
「やれやれ、こっちは片付きました…」
「いーすんさん、大丈夫ですか⁉？」
「問題ないですよ。そちらは？」
「何とか車両のコントロールは奪えました。モノレールは停止しています。ただちょっと不味いのが、高熱原体を押さえていた彼がやられました。今から迎撃に代表候補生達が出ます」
「分かりました」
この間、道を教えてくれた子が落とされてしまいましたか。状況としては微妙ですね。
モノレールまで向かう途中
「おや、夕凪さんからです…。どうかしましたか」

「主犯のウサギ2匹を捕まえた。生かしたままは無理だったが」
「無理だったんですか」
「お互いを狼に見せて、互いに戦わせたからね。被害もその方が小さいかと思って。それにこの方法なら私が手を出したわけじゃないから、罪に問われることもないし」
「まあ、分かりましたよ。簪さんの乗るモノレールに熱源が迫っているみたいです。おそらくＩＳかなんかでしょう」
「私もそこまで行くよ、座標送って」
　さてＩＳだった場合、ちょっと面倒ですね。あまり大きな被害は出したくないですし。あれを使いましょう。

「簪さん。代表候補生の方々に直ぐにモノレールまで引き上げるように伝えてもらえませんか。お願いします」
「ちょっと待ってください」
　向こうで少々話し合っているみたいですね。まぁ、無理もないでしょう。素性も分からない相手が、あれこれ言ってくるのだから。おまけに姿も見えないのでは、警戒しますよね。
「何とか先生から許可は貰えました」
「ありがとうございます」
　無事、許可は貰えたようですね。それではこちらも始めましょう。
「バイザーをしている操縦者が襲撃者です」
「分かりました」
　腕のワイヤーを彼女めがけて打ち出します。上手く引っかかってくれたみたいです。姿を隠せることが役に立ちました。
　向こうも気づいたようですが、もう遅いです。
「マシンジャック、発動」
　相手のＩＳの制御を乗っ取り、機能を停止させます。停止した場所が空中なので、相手はそのまま落下していきました。まあ、こんなものでしょう。ＩＳ学園の生徒さんが彼女を受け止めたので、どうにか

助かったようですが。

「嗚呼、疲れました。こんなに長く事情聴取されることになるとは…、まあＩＳの技術を流用したものだと言って何とか納得してもらえましたが…」

クタクタです。あの後、警察や引率の先生から色々聞かれて大変でした。まさか魔法なんて口が裂けても言えないことですし。

「まあ、お疲れ様。私よりも大変だったみたいだし」

「夕凪さんの方は大丈夫だったんですか」

「一応、色々聞かれたがね。しかし驚いたさ。あの引率の先生、今回の主犯と知り合いだったとはね。少しショック受けてたよ。まぁ、身体をいくら強化しても人間だしね。エリルに睨まれた兎の最期と同じ。終わりが来ただけ」

「それで納得できるといいのですがね」

「まぁ納得できなくてもいいさ、それが人間だ。それに私は…」

夕凪さん、いやエリルが珍しく笑った顔でこう言いました。

「あの子が守れたのだからそれで満足！」

「そうですね」

京都の夜景を眺めながら、２人で笑いあいました。

エピローグ

「こんぴらふねふね、追風に帆をかけしゅらしゅしゅしゅー」

釣竿を載せて小舟を漕ぐ。瀬戸内は今日も平和だ。

良さげな場所まで漕ぎ着けて、釣り糸を垂らす。少し釣れるだけでいい。私たちはそんなに食べないから。

「かかった」

引き上げて魚を一匹、また垂らす。しばらくしてまた一匹。この繰り返し。

お日様が沈む頃には、魚籠の中にそれなりの数が溜まる。売ることができるほどあれば万々歳。無くたって海を眺めていればいい。

「さてさてそろそろ引き揚げるかー」

櫂を使ってどんぶらこ。有明浜を目指してゆっくり漕ぎ出す。今日も平和な日だった。

「簪さんの事が載ってますよ」

ある春の日の朝、イストワールが新聞を読みながらそう言った。

「何でも簪さん、ハンドメイドの機体を作る活動を始めて、ほぼ自力で完成させたみたいです」

新聞を読んでみると確かに、簪ちゃんが私が見た事のない機体を装着している写真があった。

「よく頑張ったね、あの子」

「心なしか生き生きとしていますね」

「重荷になるものがないからじゃないの」

「夕凪さーん」

明くる日の朝、船を出そうとすると懐かしい声がした。
振り返ると簪ちゃんが自作の機体を装着してこちらに飛んできた。
「ありゃ簪ちゃんー。お久しぶりー」
「お久しぶりです」
「この間、新聞で読んだよー。それが自作の機体かなー」
「はい！紫陽花って言うんです」
「紫陽花ねー。確かにそれっぽい色をしているねー。綺麗な青紫色だー」
「ありがとうございます」
間近で見ると分かるが、本当に元気になったな、この子。
「作業用の機体だから競技大会には出られないんですけどね。それでも自分で作り上げたから、自信はつきました」
「成る程、それで元気があるんだねー。いいことだよー」
何にせよ自信がつくのはいいことだ。この子にはそれがなかったから。

折角だからイストワールも混ぜて3人で空を行く。風もなく穏やかな陽光に照らされつつ海の上を飛ぶ。
「なかなか良い機体じゃないですか、簪さん。型落ち品やジャンク品から組み上げた機体とは思えませんよ」
「ありがとう、いーすんさん」
「リサイクルして組み上げたのか、大したもんだね」
「こうすればお金もかからないですから。機体データも倉持が打鉄弐式用に用意したものを流用しましたし」
「賢いじゃない」
お金かからんよね。捨てられる物を使えば。

「さてとここいらで一休みといこうかな」
何時ぞやのバスケットと水筒をコールする。中身は勿論、抹茶のカップケーキと紅茶。
「はい、久しぶりのこれ」
「これ、初めて会った時に貰ったのと」
「そう。おんなじ」
「いただきます」
さてさてお味はいかがかな。
「そんなに苦くないです。甘いです」
「そりゃー、良かったー」
この子の心は、落ち着いたみたいだ。

幕間
未知との遭遇

身体慣らしに女神化して空を飛ぶ。定期的に変身しておかないと勘が鈍るからこうしている。尤も此処には敵なんかいないから武器は持っていない。丸腰で飛んでいる。

「動作チェックとかしたいけれど、何処かでぶっ放す訳にもいかないし」

そんなことしたら大騒ぎになる。さてどうしたものか。今時、何処の国にも属さない土地もそうそう無いし。それっぽい土地である南極なんて寒いに決まってるから行きたくない。あともう一つは近場にあるが、流石に高校を襲うようなことはしない。少し前に仕留めた兎は、平気でしていたようだが…。

「まぁ、いいさ。帰ろう」

進路を公園の方角に向けようとした時だった。空に赤い物が見えた。燃えている。人工衛星か何かか？それか隕石か？見たところ石のようだから隕石だ。この軌道だと…、少々危ないね。簪ちゃんの高校の近くの海に落ちるみたいだ。

「できる限り、小さくしておこう」

軌道を逸らすのは流石に無理だが、隕石を小さくするくらいならできるはずだ。

戦闘用の装備を呼び出す。

索敵用のバイザーとシールド兼用の万能ライフル。これくらいで大丈夫だろう。ビームサーベルやレフなどは、多分必要がない。ロケット弾を撃ち込むのも悪くはないと思うが、破片が飛び散る事を考えるとライフルの方がいい。

バイザーで周囲の状況を確認し、人や建物がない方向と角度に回り

込み、バレルの先端を展開してビームを発射する。ビームの威力を強めている以上、こうした配慮は必要だ。
「さてさて隕石は、４分の1は削り落とせたようだが……ん？」
バイザーから中心に生命反応があることが映し出されている。何かいるのか？
そう考えていると、隕石が爆散して中から蜂のようなものが出てきた。まさか巨大な蜂の巣か何かだったのか。だとしたらまずいことしたなぁ。蜂は苦手なんだよ。刺されたら痛いし。
「さて、どう来る……？」
蜂らしいからやはり針で攻撃してくるのかな。

案の定、針をこちらに向けて蜂が突っ込んできた。しかしこちらもただ見ている程、馬鹿じゃない。刺される寸前で躱して、バレルの両側に装備してあるブレードで尻尾を斬りつける。
蜂は針を斬り落とされて痛むのか、動きが鈍くなった。それでもこちらに体当たりを仕掛けようとしてきた。大したものだ。でも動きが遅けりゃ、こっちにとってはいいカモにしかならない。
「これでもどうぞ……」
ライフルの銃身を射出してクローに変形させる。蜂の胴体をそれで引っ掴み、握り潰した。思ったよりも簡単に倒せた。
「何だったんだ、一体。まぁ、いい。帰るか」
別に長居するつもりはなかったから。

「へぇ。彼奴、そんなに凄いやつだったの」
後日、公園にきた簪ちゃんから倒した蜂の正体が、世界中を騒がせている絶対天敵とかいうやつだということを教えてもらった。あれはそんなに凄いやつだったのか。あの後、さっさと帰ったから知らな

かったが、なんでも現場は大騒ぎになったとか。なんでもＩＳしか有効打を与えられないとかいう話らしいしね。でもＩＳが展開された形跡がないことから、学園ではその原因を探るのに躍起になっていたとか。まあ、簪ちゃんは大体何があったのか検討はついていたみたいだ。でも私の事は、何があっても口に出さないようにしてくれた。有り難いことこの上ない。今度お礼しないと。

「久しぶりにあれでも引っ張りだすかね。何年も使ってないから埃被っているけど…」

多分、喜んでもらえるはず。

帰ってきた打鉄弐式

「あの御蔵入りの機体が、もう一度、復活する事になるとはね。そしてパイロットに、私がなれと。おまけに、これは決定事項…」

ロシア政府からは、なにも言われなかったのだろうか。技術盗用と言われかねないことしたのに。

さっき、姉さんから打鉄弐式の凍結が解除されて、その操縦者に私が選ばれたことを伝えられた。絶対天敵の襲来とそれに伴うＩＳ学園の迎撃拠点化により、戦力の拡充の為にこの措置が取られたそうだ。

何故、高校を迎撃拠点なんかにしたんだと、色々と文句を言いたいことがあるが、そんなことはどうでもいい。言ったところでどうにもならないからだ。

ただ、わざわざ自分から手を引いたものに、何でまた関わらねばならないのか。それに関しては、黙っていられなかった。あれに関わったせいで、余計な苦労をする羽目に陥ったのに。それでオチはどうなったかといえば、機体は御蔵入り…。骨折り損のくたびれもうけである。まるで鷹の騎士が産み出した兎の将軍のようだ。

「まぁ、あの将軍同様、再利用してもらえるのならいいよ。問題は、なんで一般生徒の私を引っ張り出したかってこと…」

あの機体の封印とほぼ同時期に、代表候補生の地位からも手を引いたのに。現役の代表候補生や国家代表がいただろうに。

「大方、姉さんが何かしたんだろう…。普通に考えて、あのデータ流用発覚事件の時の操縦者に、また機体を預けるようなことをするようなリスキーな事はしないだろうから」

あの時、私も共犯を疑われたもの。周囲の人の証言で、どうにかその疑いは晴れたけど、あれで私の信用は落ちたんだよ…。　しかも機体の量産化計画が潰れた事で、裁判沙汰になりかけたし…。あの時期は、ストレスが溜まってたなぁ。それで嫌気がさして、代表候補生の地位も機体も捨てたんだ。

姉さんからすれば、機体を捨てざるを得なかった私をもう一度、専

用機に乗せたいのだろう。前の騒動のお詫びの意思も兼ねて。ただ、それは有難迷惑である。
「まぁ、決まってしまったことを、とやかく言っても無駄か…」
他に誰も乗りたがらなかったというし。当たり前だよね、政争に巻き込まれかねないって、警戒するだろうし。

「参ったな…。まともに動かない」
駆動系、武装、シールド全てに問題がないことを、確認してから装着した。すると、まともに動かなかった。指一本動かない。
このままじゃ埒があかないので、装着を解除してハンガーにかける。
「前みたいなハリボテを摑まされたわけじゃないのに…」
そういえば、ＩＳには意思があるんだっけ。ひょっとするとだけど、この子は……。
「なるほど。賢いね、あなた」
多分だけど弐式は、私が乗ることに気乗りしてないことを察しているのだろう。あのデータ流用事件の時に、機体がらみのゴタゴタのせいでストレスを溜めていた私を見ていたのだから、尚更乗せるわけにはいかないと…。良い子だ。
「貴女はよくできた子だね…。人の悩みを察することが出来て、私にとても気を遣ってくれている。ありがとう…。それとあなたのことを迷惑に思って、ごめんなさい…。短い間だろうけど、宜しくね」
気を遣ってもらっておいて乗らないというのも、大人気ないしね。

「へぇー、それでその子が帰ってきたんだー」

「ええ」
「持ち主思いのいい子じゃないー。量産されないのが、不憫だねー」
「まぁ、この子だけだと思いますよ。私が色々と苦労したのを見てきていますから」
　久々に公園に戻ってきた夕凪さんとお喋り。打鉄弐式騒動の時も愚痴を聞いてもらってたから、この子のお披露目というのもある。まぁ、指輪になったこの子を見せるくらいならば、目を瞑ってもらえるだろう。
「そんなに長い期間は、一緒にはいられないでしょうけど…」
　そう呟きながら、ふと空を見上げると小さな赤い玉が見えた。燃えているところから察するに、隕石か何かだ。そして警報が入っていることからして、あれは……。
「絶対天敵だ…」
　急いで弐式を装着する。なんとも慌ただしい初陣である。
「ちょい待ち、簪ちゃん」
　呼び止められて振り返ると、スカイハートに変身した夕凪さんがいた。
「私も付いてくよ。まだ使える武器はあるし、リハビリがてらね。手勢も多い方がいいでしょう？」
　少し悩んだが、付いてきてもらうことにした。ＩＳ学園から増援が到着するのに、時間がかかるかもしれなかったし。

　隕石の落ちた現場は、山の中だった。どうやら峠道に大穴を開けて、谷底に落っこちたらしい。
「あーあー、こりゃ酷い。結構な数の車やバイクが巻き込まれたみたいだ。風圧で飛ばされたり、接触したりで…。簪ちゃん、そっちのセンサーに生命反応は出てる？」
「いや…、殆ど出てないです。辛うじて助かった人は、あの待避所に逃

げ込んだみたいで…。そこ以外は、全くないです」
「とうとう一般人に犠牲者が出たか。しかもこのままいくとさらに増えること間違いなしだ。待避所から何とか引き離さないと…」
　言われるまでもなく、それは百も承知だが、はてさてどうしたものか。
「谷底にいるから、いっそ生き埋めにするのもありだろうけど、この辺りの地盤がどうなるかわからないからアウト…」
「そもそも絶対天敵が這い出してきたら、意味ないですしね。どちらかがあれを惹きつけて、開けたところで叩くのがいいと思います」
　ここで叩くよりは、場所によっては被害も少ないだろう。ただ開けた場所が近くにあるかが問題だ。
「簪ちゃん、バイザーにはここから西に８６５メートルほどの所に、河原があるって出てるよ。川の下流だから開けていて周りに障害物もないし、あんなでかい図体で二足歩行ならば、向こうさんも水に足がとられちゃ動きも鈍るはず」
「民家とかはないですか」
「無いみたい。それとここに来る前に頼んでた増援は、どうなった？」
「どうも他の人達は手が塞がってて、望めそうにないです…」
「余剰人員くらい居そうなもんだが、仕方ないか。誘き寄せるのは私がやるから、簪ちゃんは河原へ向かって。エネルギー持たせた方がいいだろうから」
「はい」
　派手に動かし過ぎるとエネルギー切れを起こすのが、第三世代機の泣き所。なので、大人しく指示に従う。
　女神の場合は、どうなのだろうか。あの様子を見る限りでは、そうそう起こらないみたいだけど。

　河原に待機して７分後、連絡が来た。
「獲物を追い込んだ。もう少しでそっちに着くから、威力の一番強い

やつを奴の足に宜しく」
「わかりました」
荷電粒子砲の春雷を展開して待ち構える。数十秒後に、物凄い足音とともに絶対天敵が姿を現した。ゴリラを思わせる太い腕を持ったタイプだ。性格もゴリラと同じならいいのに。
「そこっ！」
踏み出そうとしていた足とは反対の右足の膝目掛けて、荷電粒子砲を発射する。
最大出力で発射したのが功を奏したか、ゴリラ擬きはバランスを崩して転んだ。頭から川に突っ込み、派手に水しぶきを上げている。この季節なら水はまだ冷たいから、きっと寒いだろう。
さてとゴリラ擬きのコアはどこかな。起き上がる前に探したいけど、そう簡単にはいかないみたいだ。今にも起き上がろうとしている。
薙刀の夢現を構えつつ、様子を伺っていると、空から大きな腕が二本飛んできてゴリラ擬きの頭と腰を押さえつけた。
「大人しくしろ」
もがくゴリラにスカイハートが冷たく言い放った。
「簪ちゃん。こいつには心臓ってあるの？」
「はい。今、レーダーで探してます」
「そうかい。急いでおくれ。私も手伝いたいのは山々だけど、あの腕を壊さないようにしなきゃいけないから……。大物相手に使える武器が、これくらいしか残ってないんでね…」
よく見ると大腕は、両方ともボロボロになっている。確かに時間はない。
「急いで、弐式！」

探ること、２分。漸くコアが見つかった。左胸の辺りだ。
「左胸にあります！人間の心臓と同じです」
「あいよ！」

スカイハートさんが腕に持っている変わった形の銃を、背中目掛けて発射した。でも一度発射すると、煙を上げて壊れてしまった。
「不味い、ここで限界が来たか！簪ちゃん、その機体で一箇所に集中攻撃できる武器ってある⊠」
一箇所に。それならあれを応用すれば、上手くいくはず。粒子砲とは違って、エネルギー切れも起きないし。
「あります。もう少し抑えててください！」
照準を弾痕に全て合わせて、山嵐を発射する。マルチ・ロックオン・システムの無駄遣いだが、一々計算するよりは楽だ。
コアの部分が露出したのを見て、夢現を構えて飛び込み突き刺す。心臓を刺し貫かれた絶対天敵は、暴れるのをやめて溶けてしまった。
「打鉄弐式…、良くやったよ…」

「あーあ、これじゃ使い物にならないね。当分は代わりの物を使わないと…」
スカイハートさんの武器は、どちらもお釈迦になってしまったみたいだ。
「何でここまでボロボロになったんですか？」
「この間、とある世界で知り合ったボランティア活動の中学生達の手伝いをしに行った時に、色々あってね。持ってた武器の殆どが、こんな状態になったんだ。イストワールも足が壊れてしまって、大変だったよ。今は何とか治ったけどね…」
そこで一体何が起こったんだろう。まさか怪獣でも暴れているんじゃないんだろうか。
「当たり。偶にだけど、怪獣は暴れているね。絶対天敵よりももっと怖くてタチが悪いのが。でもそれ以外は、長閑でいい所だよ。今度連れてってあげようか？」
即座に首を横に振った。冗談じゃない。アニメや特撮ドラマみたいに、怪獣が出てきてもなんとか出来るとは思えないからだ。

「あら残念。学生さんでも通えるほど、安くて美味しいうどん屋さんがあるのに…」
　スカイハートさんは残念そうにしているが、わざわざ危ない所に飛び込もうとするほどの度胸はない。
「ま、気が変わったら言いにきてね。他にも同じくらい危ないけど、面白い所、知ってるから…」
「は、はぁ」
　気分が変わることってあるのかな。命は惜しいし。
「簪ちゃーん」
　姉さんの声がする。漸く援軍が来たか。もう遅いけど。
「おっと。お姉さんのお出ましかな。余り良い顔されないだろうし、ここいらでお暇させてもらおうかな…。それじゃ…」
　スカイハートさんは、手を振りながらそのまま消えてしまった。
　この後、到着した姉さんや他の専用機持ちから、あれは誰なのかと詮索されたが、口には出さなかった。夕凪さんに迷惑かけてしまうだろうし。現に姉さんと本音が迷惑かけたしね。
　ただ帰ってから同室のクーリェという子には、ぼかしながら明かした。この子は、あの人と一度会ってみたほうがいいと思ったから。
「クーのお話を何でも聞いてくれる人……？」
「そう。何だって何も言わずに聞いてくれるお姉さんがいるんだ。如何かな。会ってみない？」
「どうしようかな…。ルーちゃん？」
「会いたいと思ったらいつでも言ってね」
　まだ小さいのに、こんな所にいるんじゃストレス溜まってるだろうし。いいガス抜きになると思うけどね。
「ちょっと考えさせて…。ルーちゃんもそうしたいみたい…」
「そっか」
　まぁ、急に言われてもこうなるかな。

クーリエ・ルククシェフカと教祖イストワールの章

イストワールとクーリエ

「ルーちゃん…。ここがその公園みたいだけど…」
簪さんに連れてきてもらって、公園を覗き込んでみたけど、それらしき人は居ない…。
「何時も居るわけじゃないし、帰る？」
「どうしよう。ルーちゃんに聞いてみるね」
こういう時は、ルーちゃんに相談してみる。良い答えが出るかもしれないから。
「ルーちゃん…、え、誰か近くまで来てる…」
「あら、簪さん。夕凪さんなら居ませんよ。武器の修理をしているので」
横から誰か話しかけてきた。見てみると金髪のお人形さんが、本に乗って浮いていた。
「あ、いーすんさん。こんにちは。夕凪さん、居ないんですか。日を改めた方がいいかな」
「急ぎの用事でもありましたか？あの絶対天敵が手に余る程、襲って来たとか」
「いや、そういうわけじゃないんです。この子と会ってもらいたいと思ってて…」
「あら、そういう用件でしたら、私が代わりを務めましょうか？聞き手に回ることも慣れてますし。そちらの方が良ければですが…、どうでしょう」
いーすんさんと呼ばれたお人形さんが、こっちを向いた。
「どうする？」
「お、お願い…します…」
不安だけど、ちょっとだけ話してみたい。このお人形さんと。

公園のベンチに座ってお話をする。
「改めて初めまして。私はイストワールといいます。貴女のお名前は？」
「クーリエ・ルククシェフカ…です」
「クーリエさんですね…、『良いお名前です』」
「へっ？」
今の……、私の国の言葉……。
「とても可愛らしくて、貴女にあった良いお名前だと思います」
間違いない…。私の国の言葉…。それもパパとママが生きてた頃に、聴いていた話し方と全く同じ。
「イストワール、私の国の言葉がわかるの？」
「勿論」
少し安心した。ここでも、今のお家でも、この言葉は聴こえてこないから。ルーちゃんもこういう風には話せない。だから久しぶりに聴いて、ホッとした。
「クーリエさん。落ち着きましたか？」
「うん…、この話し方をする人、ここだとどこにも居ないから」
「確かにここだと居ませんね。そういう人を見つける方が大変でしょうし」
「それに、ルーちゃんも話せないんだ」
「そのようですね。私が話していたのを見て、驚いているようですから」
ルーちゃんのいる方に、首を向けている。他のみんなみたいに、わざとらしくない。本当に見えてるみたいだ。
「貴女の事が大好きなんですね。その子」
「うん。パパとママが居なくなってから、ずっと一緒にいるの」
「居なくなってから…」
「今のお家に来てから、ＩＳの訓練をしなきゃいけなくなった時も、この国に来なくちゃいけなくなった時も、ずっと一緒…。したくないことしなきゃいけないときに、励ましてくれるの…」

「いいお友達ですね…。少しでも勇気付けてくれるなんて」
「うん…」
「クーリェさん。その子は大事にしてあげてください。ずっと一緒に居てくれる人は、貴女にとって強い味方ですから」
「そうだね…」

「そういえば、ＩＳには乗りたくなかったんですよね。何でですか？」
「怖いから…、乗りたくないの」
　何時もは、こんなこと言ったら笑われる。落ちこぼれの専用機持ち……って…。でも怖いものは怖いし、嫌なものは嫌だ。でもそんなこと言ったら、お家を追い出されるかもしれない。だから言えなかった。
「怖いの嫌なの。乗れるからって……、動かせるからって……、何で怖いことしなきゃいけないの？」
「成る程、それは嫌ですね。怖い事をしたくないのは、当たり前の事ですよ。そう思うのが、普通です。貴女は何にも間違ってないし、悪くないです。寧ろ貴女ぐらいの子に乗れって言った人達の方が、おかしいんです」
「そう…なのかな…」
「ええ」
「つ、辛かった…。誰にも言えなくて、辛かったよ…」
　えぐえぐと泣き出す私の背中を、イストワールは何も言わずにさすってくれた。
「それでいいんです。それで。自分に正直になってください。クーリェ。ここには、貴女の重りになる人はいません。そんな人が来たら、私が跳ね除けます。私は貴女の味方です」
「あぁぁぁあ。マーマ…」
　居なくなってしまったママみたいに暖かくて、思わずそう言ってしまった。

「よしよし、可愛いクーリェ…」
ママは、私が泣き止むまで、ずっと抱きしめてくれた。

「簪さん、この子をＩＳから切り離すことって、何とかできませんか」
簪さんとママが難しい顔をしてお話ししている。
「うーん、ロシアの事ですからね。日本からは何ともしようがないですし、何とかできそうな姉さんは国家代表であっても、その国に影響力があるわけではないですし」
「オリンピック選手だからといって、国のことに口出しできるわけじゃありませんもんね」
「そういう理屈です。それに姉さんは、前の不祥事でロシアから睨まれているから、元々あてにはできませんし」
「ああ、弐式の件ですか。確かに無理なことはできませんね…」
「ええ。私としても何とかしたいですけど、高校生にできることはありませんし…。ＩＳが出回っている世の中じゃ、どうにもできないです」
「ＩＳが優先か、人の意思が優先か…。普通に考えたならば、答えは一目瞭然でしょうに」
「全くですよ…」
簪さんとママが渋い顔をして、黙り込んでしまった。
「あ、あの…。またママに会いに来ていい？それなら、ちょっと我慢できる」
「え…ええ、それは構いませんよ。貴女がそれでいいのなら」
「ありがとう」
「いえいえ。いつでもいるわけではないけど、また会ったらお話しましょうね」
「うん！」

「また一人子供が出来てしまいました…。でも、ちょっと嬉しいです」
二人が帰っていくのを見送ると、辺りは暗くなり始めてました。
「いけない！今日の夕食当番は、私でした」
「作っておいたよ。イストワール、いや……お母さん」
振り向くとスカイハートに変身した夕凪さんが立ってました。
「あら、夕凪さん…」
「嫌だな、エリルって呼んでよ。私が女神になる前みたいにさ…」
「そうですね、エリル…」
「あのクーリェって子、なかなか苦労しているみたいだね。なまじ素質があるばかりに、やりたくないことをさせられるなんて」
「ええ、しかも現状では打つ手なし」
「どうしたものかね。ＩＳばかりが全ての世界じゃ、あの子は候補生をやめるのだって大変だろう。嫌なものだね」
「ええ。クーリェには、気持ちというものがあるのに。エリルの言う通り、嫌なものですよ……」

もう、乗りたくない。怖い思いするのは、もう沢山だ。

クーリェが少し明るくなった。いーすんさんに会ったのが、良い影響だったみたい。私としても嬉しい。いつも不安そうで見てられなかったから。姉さんは首を傾げていたけど。

「息抜きは、老若男女問わず必要。ただそれだけのこと」

見知らぬ土地に連れてこられた訳だし、せめてガス抜きできるようにしないと。いーすんさんに漏らしてたけど、あの子はＩＳそのものがストレス源だしなぁ。しかも私のように手放せないし…。仮に手放したとしても、十中八九、ＩＳの適正値が邪魔するんだよね。

「自分の人生を自分で生きられないとは、まさにこの事だね…。おかしな話だよ…。あの子がどう生きるかは、あの子次第。あの子に全てを決める権利があるし、とやかく言われない権利だってある。それがどうしてわからないのやら…。子供に望まない事をさせない事は、何よりも重要な事じゃない…」

大人がそれを分かってないんじゃ、この世界は先が見えたも同然かなぁ。夢も希望もない。ＩＳが全て。

「いっそ、滅びるべきかな…？宇宙服擬きに、支配されるよりはマシかもしれない…」

何だか勝ったところで、良い事なんてないように思えてくる。わざわざ抵抗したところで、宇宙服擬きに生き方を縛られる人が出るようじゃ、仕方ないし。

お茶の空き缶を片手に、物思いにふける。

「クーちゃん、何処にいるの」

姉さんの声だ。どうしたんだろう。

「ああ、簪ちゃん。クーちゃんが見当たらなくて。そろそろ訓練の時間なのに」

「訓練ねぇ…」

逃げ出したんだろう。やりたくないことだから。子供のわがままと言えば、それまでかもしれない。でもＩＳの操縦自体は、あの子は別にやりたくてやってることじゃない。させられているのである。

「見てないよ。別にいいんじゃない。あんな小さい子を戦力にしなくてもさ」
「それはそうだけど、絶対天敵が襲ってくる状況じゃ、そうも言ってられないのよ」
まぁ、確かにね。４６７機という中途半端な数しかない上に、乗りこなせる人間も多くないんじゃ、人手不足になってしまうのもまた事実だ。
「まぁ、乗りたくなくなったんじゃない。話を聞く限りでは、あの子、元々起動させることすら嫌がってたそうだし。良い機会だから、ＩＳから離れさせたら？ランクこそ低けれど、ロシアにはまだ乗り手いるでしょ？それとこれ……」
姉さんにボイスレコーダーを渡す。この前のいーすんさんとクーリェの会話が入ったものだ。
「クーリェの本心が入ってる。また聴いておいて。私はそろそろ訓練に行くから…、それじゃあね」

「クーちゃん。貴女が本当に乗りたくないのは、分かっているわ。でもね、今はそれどころじゃないの。何とか出てきてちょうだい」
訓練が終わってから、寮に帰ると姉さんが、他の代表候補生と共に、私の部屋の前でドア越しに呼びかけていた。成る程、部屋に立て篭もったのか。しかしこれじゃ出てきてはくれまい。戦力としてしか見ていない連中のところに、クーリェが戻ってくれるわけないだろう。仲間だ何だって言いようはあるが、実際のところは戦力として見ているに過ぎない。
「何、大勢で人の部屋に押しかけてるの」
「ああ、簪ちゃん。見ての通り、クーちゃんが立て篭もっちゃって出てこないのよ。ピッキングして入ったところで、警戒させちゃうだろうから、どうしようもなくて。皆で呼びかけているけど、天照大神みたいに出てこないのよ」

あの女神を例えに出すとは、相当粘ってるみたいだ。
「もう、やめたら？ここまで拒絶してるんじゃ、しょうがないよ」
「でもあの子のわがままで、穴を開けるわけにはいかないんじゃない？」
カナダから来た双子の歌手がそういう。他も同じ意見みたいだ。
「貴女みたいに、乗りたいから乗ってるわけじゃないんだけどね。あの子」
「えっ？」
「あの子はただ、ランクが高いということで乗せられているだけ。それに前の私みたいに、別にＩＳが操縦できなきゃいけないなんて理由もない。理由なくやらされているだけ。これじゃ、嫌気がさすのも無理ないよ。退いて」
専用機持ちを退かせて、ドアを叩く。
「クーリェ。私。開けて」
鍵が開いた。開ける前に専用機持ちを追い払った。中に入られても困る。
「とっとと自分の部屋に戻って。ここに居たって無駄だよ。あと、あの録音データも聴いておいてね」

「クーリェ。もう大丈夫だよ」
抱きついてきたクーリェを落ち着かせる。
間食用に購買で買ってきたクリームパンと１００パーセントのりんごジュースの缶を渡して、食べさせる。お腹が空いてたのか、凄い勢いで食べている。
「何にも食べずに隠れてたの？」
「うん」
こりゃ相当だ。多少、強引な方法を使ってでも、早く手を打たねばならない。でも私じゃどうにもならないのは、わかっている。こうなったら、あの人に頼むしかないかも。何か策を考えてくれるかもし

れない。
　この前、教えてもらった念話を使い、夕凪さんに呼びかける。
「夕凪さん、ちょっと相談に乗ってもらえませんか」
「何かなー？」
　すぐに返信が来た。有り難い。
「実は、これこれこういうことでして…」

「成る程ねー。一応、イストワールから話は聞いていたけどー、そのクーリェって子は、これ以上、ＩＳに乗りたくないとー。うーん、普通の方法じゃ、切り離せないねー」
　あまり芳しくない答えが返って来た。夕凪さんでも、無理だったか…。
「そうですか…」
「ちょっと待った。話は終いまで聞かなきゃー。普通の方法じゃ無理ってだけだよー」
「普通の方法では…？」
「かなり荒っぽい方法になると思うけど、死んだふりをして此の世界からおさらばするってのは如何？絶対天敵との戦闘中に…って寸法で」
「何処に連れて行くんですか？」
「私がいたのとは、別の次元の女神のところ。変わり者だけど、悪い子じゃないよ。あの次元なら、私が前に言ってたような怪獣が暴れることは、早々ないから安心して過ごせるよ」
　それなら良かった。
「でもこれはクーリェが嫌がったら、お流れになりそうな作戦ですね」
「それはクーリェちゃんの意思を尊重するしかないしねー。兎も角、クーリェちゃんの同意が得られたら直ぐに教えてねー。こっちにも準備があるからー」
　念話を終えて、スマートフォンのメモ帳機能を使い、クーリェに質

問する。
「ＩＳに乗らないで済むなら、別の世界に引っ越しても良いと思ってる？」
　見せられたクーリェは、如何いうことかわからないようだった。
まぁ、こんな事突然言われても、困惑するよね。
「別の世界へ行けば、もう乗らなくて済むの？」
「うん」
「本当に乗らないで済むの？」
「うん」
「それならそうしたい。でもアチェーツとマーチのお墓があるし…。
それにママに会えなくなるのは、嫌」
「その二つが何とかなれば、良いんだね」
「うん」
　クーリェからの承諾は得られた。
　直ぐに夕凪さんにその旨を伝えた。さて、一体どんなことをするのやら…。

「簪ちゃんからの連絡を確認。クーリェちゃんのご両親のお墓とイストワールのことを解決できたら良いんだね。よし…」
　必要な条件がわかった以上、早急に連絡を取らねばならない。
「イストワール。プルルートと連絡を取って。そっちに移住する人が出るって。あと風さんやそのっち、それに弦さんにも、念の為に連絡を入れておいて。不測の事態が起きるかもしれないから」
「分かりました。夕凪さんは？」
「ロシアに行って、やることやってくる。それじゃ」
　さあ、忙しくなるぞ。それと多分、ここにはいられなくなるだろうな。
「悪いけど、荷物も纏めといてね」

脱出前夜

「クーリェちゃんのご両親の改葬が、終わったよ。別次元の墓地に移し終えた。書類上の改葬場所には、重りとマネキンを入れた偽の棺を埋めてある。墓を開けられない限り、バレはしないだろう」

２週間後、スカイハートさんからの連絡が来た。成る程ね。改葬の準備ならば、それなりに時間はかかるか。

「あと移住先の女神とも、話しは付けてある。向こうも了承してくれて、ここまで迎えに来てくれているから、今度、公園までおいでよ。それと不測の事態に備えて、私が行った事ある二つの世界には、連絡も入れてあるから安心して。万が一、そこに流れ着いても、保護してくれることを承知してくれたから。何せ、絶対天敵よりもずっとおっかなくて、ＩＳじゃ歯が立たないのがいるからね。尤も最近は、其奴らも居なくなったり、出没する事が少なくなったりしてるから、そうそう恐ろしい目には遭わずに済むと思うよ。それにそういうのを専門に相手にする人達がいるからね。クーリェちゃんにも教えておいて。それじゃ」

かなり話は進んでいたようだ。クーリェに置いていっても困らない物を選定しておくように、言っておいた甲斐があった。

「クーリェ。そろそろだよ。貴女のお願いもみんな聞いてくれた。いつでも抜け出せるようにしておいて」

メモ帳を使い、クーリェと会話する。

「わかった」

「怖い思いを最後にすることになるかもしれないけど、我慢出来そう？」

「頑張る。もう乗らなくていいなら」

「よしよし、良い子だ」

もう苦労はかけさせないからね。

「はじめましてー。プルルートだよー」
　クーリェを連れて公園に行くと、だぼだぼの服を着た眠たそうな顔をした人が、夕凪さんと一緒に居た。いつもの夕凪さんと話し方が似てる。
「貴女がエリルちゃんの言ってた子かなー」
　エリル？聞いたことのない名前だ。会話から察するに、夕凪さんのことらしいけど。
「ああ、それは私の本名。こっちでエリルなんて名前じゃ、目立つから夕凪で通してたんだ。夕凪でいいよ」
　確かにエリルなんて名前、日本人には無いしなぁ。
「それでそこの子が、クーリェちゃんかなー？宜しくねー」
「よ、宜しく…、お願い…します…」
「よろしくねー」
　クーリェが、チラチラ周りを見ている。誰かを探してるみたいだ。
「どうしたの。クーリェ」
「ママが居ない…」
　ああ、いーすんさんを探してたんだ。そういえば、この子はいーすんさんとしか会った事ないものね。
「夕凪さん。いーすんさんは、今日は公園に来ないんですか」
「来るよ。そろそろ」

　１０分くらいして、いーすんさんが紙袋を抱えて、公園に入ってきた。
「ママ！」
「クーリェ。よく来ましたね。元気そうでなによりです」
　いーすんさんの小さな身体に、クーリェが飛びついている。いーすんさんはクーリェよりも小柄なんだけど、不思議と本当の親子にも見えてくる。この歳だもの、お母さんが恋しい筈だ。
「おお、よしよし…」

「ママ、ママも一緒に来てくれるよね？」
「ええ、貴女を1人にはしませんよ」
潰されそうになりながらも頭を撫でて落ち着かせている。手慣れている様子だ。どうやらこの人、子供の相手をするのは、一度や二度じゃないみたいだ。

「あと少しの辛抱です。あと1週間待っててくださいね？」
「うん！」
学園にいる時とは、まるで違うクーリェ。やっぱりこの子は、戦いに巻き込むべきじゃなかったんだ。この様子を見ているとそれがよくわかる。あと1週間で、この子は苦しみから解放される。
「簪ちゃん…、ちょっといいかい…」
いつのまにか背後にいた夕凪さんが、服の袖を引っ張っていた。おまけに指で頭を叩いている。念話で話したい事があるみたいだ。
「クーリェちゃんのＩＳって、普段はどういう形をしてるの？」
「あのクマのぬいぐるみです」
「あの大きいのがかい…。ということは、あのぬいぐるみがＩＳに変化してるのかな？」
「いえ、中にあるコアが変化するだけです。ぬいぐるみは、何も変わりません」
「それ聞いて安心したよ。ぬいぐるみ其の物が変化したんじゃ、壊すわけにもいかないからね」
「確かに。あのぬいぐるみは、クーリェの安心毛布ですから」
「あともう一つ、聞いておきたい。ＩＳって展開したまま、脱ぐ事は出来るよね」
「はい。それは大丈夫です」
「良かった。そうじゃなかったら、クーリェを痛め付けることになるところだったからね。機体は、もう使い物にならないレベルで破壊する予定だから…。あと、荷物は今日の夜取りに行くね。そろそろ運び出した方がいいだろうから。あと最後に……、一つだけ聞いておきた

い事があるんだけどね…」
「何ですか？」
「あの子の所属は、確かロシアで良かったよね」
「はい、そうですよ。予備代表候補生という妙な立ち位置ですけど」
「それで君のお姉さんも、ロシア所属だよね」
「ええ、それが何か？」
「少し気になったんだが、お姉さんはクーリェちゃんの監督役なんて事はないよね」
「それはないです。監督役は、担任の織斑先生が担当しています。姉さんはまだ未成年者ですから。そこの所は、大人の人が担当することになってます」
「妥当なラインだね。しかしそれならば、クーリェ失踪の責任が、君のお姉さんに及ぶことはないと見ていいね」
「恐らく大丈夫だと思います」
「わかった。手筈通り進めよう。では1週間後」
「はい」

大団円

クーリェの出発のときが来た。いや、正確には数時間早まった。真夜中に亡国機業と絶対天敵が同時に襲ってきたからだ。しかも後者は何箇所かに分かれて。

亡国機業は例の彼や姉さんやギリシャから来た候補生が対処し、私達は絶対天敵の対処に向かった。

二人一組でペアを組み、それぞれの場所に対処に向かう。ペアを組む相手は、言うまでもないがクーリェだ。あの子がまともに言うこと聞く相手は、学園ではもう私しかいないから。

御誂え向きの状況だ。

「丁度いい。3日前から準備は整っているらしいし」

すぐに夕凪さんに連絡を入れて、作戦を始めてもらうことにした。向こうも問題ないようだ。

「荷物を纏めさせておいて正解だった」

簪ちゃんからの連絡を受けて、こちらも支度にかかった。

まず増加装備を換装したイストワールへ連絡を入れて、最終点検と火を入れるように命じる。増加装備に何かあったら、移動時に問題が起きた時、対処出来なくなる。モンスターの類いならイストワール単体でも何とでもなるが、とてもじゃないがそうはいかない奴、例えばバーテックスやノイズと当たった時に、何も出来ないまま終わってしまう。おまけにクーリェもいる。プルルートも付いて行ってくれるが、例えに出したやつらが出てきたら、如何にあの子でも梃子摺るに相違ない。だから増加装備の故障だけは、絶対に避けねばならない。

「ユニット内の機構は、全てにおいて異常ありません。火も入れておきました」

「了解。後はプルルートに護衛してもらって。もう一仕事してくる」

落ちてきた絶対天敵を拠点の近くの罠にまで誘導する。
何故、そんなことをしているのか。答えは簡単。クーリェの失踪は、あくまでも自然なものにしなければならない。だから絶対天敵や学園を襲撃するテロリストに、早い話が罪を被ってもらう他ないのだ。
そして生きていようが、死んでいようが、口の利けない絶対天敵という都合の良い奴が来たのだから、これを利用しない手はない。
「しかもこの前のゴリラときた。彼奴の太腕で潰されたことにしておくか……」
それっぽく見せる事はできる筈。血糊をまいて、機体をゴリラごと爆発させたら、まぁ、分かるまい。その他にも、色々と誤魔化すためのものは、色々なところから掻き集めてきた。気持ちの良いものではないけど、子供のためだ。それくらい我慢できる。
絶対天敵を罠に掛けて、転倒させ簡単に起きられないようにしておき、南東の空を睨む。
「さてと、そろそろ来ても良いはず……」

「来たッ！」
２分程して、２人が飛んで来た。こちらもそれに合わせて、絶対天敵から抑えを退ける。
跳ね起きた絶対天敵を３人で適当に相手をしつつ、頃合いを見計らった。
すると不意に絶対天敵がバランスを崩し、前のめりに倒れてきた。倒木にでも蹴躓いたのだろう。
簪ちゃんと支えながら、クーリェに指示を出す。
「よし、クーリェ。ＩＳはそのままにして、ママのいる方に行くんだ！」

「どっち……？」
「あの方角だ。ほら、彼処に白い光がチカチカしてるでしょ。彼処にいるんだ」
　夜間に連れ出す事にしていたから、居場所を知らせる為に投光器をイストワールに持たせていた。白い光ならば、夜中でも見えやすい。第三者に気づかれるおそれもあるが、どうせ逃げ出す身だ。問題ない。
「この前、公園にいたお姉さんが、君とママを守ってくれるから。さあ、行きなさい！」
「わ、わかった。お姉さんも……、怪我しないでね……」
　ＩＳスーツを着たままぬいぐるみを引きずりながら、光の方角へ走っていくクーリェを見送り、私はクーリェそっくりに化けて、あの子のＩＳに飛び乗った。
「ゆ、夕凪さん！　動かせるんですか?!　それにその体」
「前に捨てられていた教科書を読んだことあるから、動かすくらいなら大丈夫。もう一つは、後で説明する」
　それにクーリェの動きの癖は、さっきの動きや改葬の手続きをした時に保管庫からコピーしてきた記録映像で見ているから、大体の真似は出来る。
「ここからイストワール達が離脱するまでが勝負だ。簪ちゃんは適当なところで、兼ねてからの手筈通り、伸びておいて。悪いけど」
「はい。夕凪さんも程々に……」
　まぁ、ぶちまける物は別にあるから、そこまで酷い怪我をする必要はないはずだ。年頃の娘さんの前で見せるものじゃないけど。

　２分くらい経った時に、プルルートから連絡が来た。クーリェを見つけて、イストワールの所に連れて行ってくれたらしい。
「ありがとさん。この御礼はいつかきっと……」
「じゃあ無事にこっちに来ることができたら、貴女の身体で遊ばせて

ちょうだい……。ふふふ……」
　とんでもない条件を突き付けられたものだが、まぁ、それくらいならいいか。イストワールの仕事も世話してもらってるし。それにプルルートも機嫌さえ損ねなければ、そうそう無茶苦茶するわけでもない。
「あいよ。そんじゃ、その時を楽しみにしてなよ。きっついウィスキーとラベンダーのアロマキャンドル用意しておいてね」
「ふふふ……。待ってるわぁ。ああ……、そうそう。クーリェちゃんといーすんが、無事に帰ってきてって言ってたわよぉ」
「そうかい……。じゃあ2人に伝えておいて。私は不死身だって」
「りょうかぁい。それじゃあ、先に行ってるわね」
　プルルートとの連絡を切って、簪ちゃんに頃合いだと合図を出す。
　それを見た簪ちゃんは、荷電粒子砲とミサイルで絶対天敵の心臓部を攻撃しながら退避を始めた。私も一歩遅れて、槍を投げつけ、コアが露出したところで大剣を投げつけて貫通させ、絶対天敵から逃げようとした。
　ただ、少しやり過ぎてしまった。露出したコアを刺したのはいいけど、そのせいで絶対天敵が地面に倒れてきてしまった。
「うわーっ！」
　しくじりに気づいた時はもう遅かった。そのまま2人して、絶対天敵の下敷きになってしまった。

「うぐぐぐぐ……、や、やっと抜け出せた」
　ゴリラの胴体から蹌いて、なんとかはい出せた。でも足は動かないし、打鉄弐式も大破、ISコアもぺちゃんこになってしまった。まぁ、それはいい。それよりも夕凪さんを助けないと。
　何とか壊れずに済んだ紫陽花を起動させて、部分展開させたクレーンで絶対天敵を起こそうとすると、爆発を起こして吹き飛んでしまった。

「いけない！」
爆発が収まったのを確認して、絶対天敵がいた所まで這い寄る。すると其処には、原型をとどめていないクーリェのＩＳとその……口に出せない物が転がっていた。
「ま、まさかそんな……うぷっ」
思わず吐いてしまった。
「ゆ、夕凪さん、夕凪さん……！」
慌てて探すもあの人の服の切れ端も見つからない。さっきの爆発で……。
「勝手に殺さないでよー、簪ちゃんー」
「へっ？」
私が真っ青になっていると、背後から聞き慣れた声がした。
振り返ると……、少しボロボロになった夕凪さんが居た。
「ちょっと堪えたけどね……、この通り平気だよー。簪ちゃんこそ大丈夫ー？」
さっきと違って、いつもの口調で話しかけてくる。ああ、良かった。
「立てるか……、ど、どうしたの……」
「良かった、無事で良かった……」
怪我しているかもしれないのに、思わず飛びついて泣いてしまった。
「ああ、大丈夫大丈夫ー。唾つけておけば、治る怪我だからねー」
「死んじゃったかと思った……」
「あれくらいじゃー、死なないよー。鍛え方が違うからねー」
いつかのように、義手で頭を撫でてもらった。

ＩＳ学園から救援が来る前に、夕凪さんは姿を消した。怪我をしていたから引き留めたのだけど、プルルートさんのいる所で治療を受けるからということで姿を消してしまった。
それで事後処理については、まぁそこそこ荒れていた。

私はどうなったかというと、ＩＳがコア諸共潰れたことや学園所有のライブカメラがあの辺りにはなかったことから、事の真相が分からずじまいになったため、特に責任を追求されなかった。しようにも根拠がないのだから。

また姉さんも、特に責任が追求されることはなかった。姉さんはそもそも関わってなかったのだから、当たり前といえば当たり前だ。

寧ろ、学園の上層部の方が、責任を追求された。１０歳のクーリエを絶対天敵対策の為の要員にしたことで、批判が殺到したんだ。その対応に追われて、当分の間、学園は休校になった。

そしてこれが一番大事な事なんだけど、国家代表や代表候補生の資格に年齢制限が加わった。最低でも１４歳にならないと資格が取れないということになった。現時点で資格のある人は有効なままだけど、危険な任務を任される事はなくなるみたい。めでたしめでたしだ。

私の足さえ折れていなければ、もっと良かったのだけど。

休校なものだからやる事がなく、治療を受けて戻ってきていた夕凪さんに頼んで、この前言っていた危なっかしい場所の一つに連れて行ってもらった。車椅子で行っても大丈夫らしいから。

「これからは専用機持ちがおいそれと引っ張り出される事も早々ないと思います。国連軍がどうにかするみたいですから、私としては万々歳です」

「そりゃー、良かったー。足は大丈夫？」

「大丈夫ですよ。あと1週間すれば、治るみたいです。それにしても、車椅子って動かすのに体力使いますね」

「足の代わりに腕を動かさなきゃいけないからねー」

行ってみたら、別になんて事なくて安心した。

「それでこれから何処に？」

「行きつけのねー、うどん屋だよー」

うどん屋か……。あまり行く事がないから、ちょっと楽しみ。

「確かに安いですね……、そして美味しい。おまけにバリアフリー設備が整っている……」

「常連さんにそういう人がいたからねー」

かき揚げをトッピングに乗せた醤油うどんを手繰りながら、店の中を見回す。夕凪さんは夕凪さんで、釜玉うどんといなり寿司を食べている。

「今日は、あの子達来てないみたいだねー」

「あの子達？」

「ほらー、いつだったか話したでしょー。ボランティアしている中学生がいるってねー」

そういえば、そんな事言っていた気がする。

「あの子達、よくここに来ているからさー。上手いこと、顔を合わせられたらなーって思ったんだー」

「忙しいんじゃないですか？」

「そうかもねー。多い時はねー、確か週に５０件も依頼を引き受けていたからー」

「無茶しますね、その子達。でも凄いや」

「本当にねー。あーそうだ。簪ちゃん、これー。クーリエからー」

そう言って手渡されたのは、絵葉書だった。二つのタワービルが組み合わさった建物がある。向こうの世界のシンボルらしい。

「今じゃ、向こうでのびのびとやってるよー」

絵葉書には、拙い文字でこう書かれていた。

「かんざしさん。わたしをママとあわせてくれてありがとう。わたしはいまプラネテューヌで、ママとふたりでてさぐりながらも、がんばって生きています。ここの学校でともだちもできて、とてもたのしいです……」

良かった。逃げ出したところで、向こうの世界で馴染めていなかったらどうしようと心配していたから……。うまくいっているみたいで安心した。
「そのうち何処かの世界で、また会いたいんだって」
「そうですか……。その時を楽しみにしていると伝えておいてください」
「はいはーい」
クーリェの新生活が、充実したものだということが分かったからか、うどんがさらに美味しくなった気がした。

引越し

「無事に辿り着けたわねぇ。ちょおっと物足りないけどぉ」
「いやいや。いくら私でもこの子を抱えながら戦うのは無理ですから、助かりました」
　増加装甲の腕の中でぐっすりと眠っているクーリェを抱えながら、私とプルルートさんは、夜のプラネテューヌの首都上空をゆっくりと飛んでいきます。
「家具の運び入れの時に、掃除も済ませておいたからぁ、着いたら直ぐに寝られるわよぉ」
「ありがとうございます」
　この時間から掃除するのは、大変ですからね。本当に有難いです。

　首都の郊外にあるこじんまりとした二階建ての屋敷の門の前に、私達は降り立ちました。
「あの子と一緒に旅に出る前に、使ったきりですからね。久しぶりです」
「入る前にクーリェちゃんを預かるよ～」
　変身を解除したプルルートさんが、寝ているクーリェを抱きかかえたので、私は増加装甲を解除し、手渡されていた鍵で門を開けました。
「今日泊まってもいい～？」
「構いませんよ」
「やったあ～。タワーだとぉ～、ちっちゃいいーすんが仕事しろって煩くてぇ～」
「帰ったらその仕事は片付けてくださいね。私も手伝いますから」
「えぇ～」

　リビングに荷物を置き、ソファーに腰を下ろして一息着きました。
「疲れたぁ」
「久しぶりに冷や冷やしましたよ。でも無事にこの子を助けられて良

かったです」
　ソファーに横たわるクーリェの寝顔をそっと撫でて、思わずふっと笑みが溢れました。
「本当にお母さんだねぇ～。大っきいいーすんは～」
「そうですか？」
「エリルちゃんの時もそうだったけどぉ～、クーリェちゃんにも町で見かけるお母さんみたいな顔してるもの～」
　知らず知らずのうちに、そういう顔になるものなのでしょうか。
「久しぶりの子育てだから頑張らないと」
「私達も手伝えることは手伝うねぇ～。あ～、エリルちゃんから連絡が来たよぉ～。ちょっと怪我したって～」
　何ですって！
「だ、大丈夫なんですか?!」
　あの生物は正体がよく分からないからよくよく警戒して対処するように言ったのに……。
「ただの擦り傷みたいだよぉ～。手配しておいたお医者さんも心配いらないって言ってたって～。今日は、タワーに泊まっていくって言ってたよぉ～」
「良かった……」
　これで大怪我でもしていたら、クーリェも気まずくなるでしょうし、一先ず安心です。
「あぁ、忘れるところでした。園子さんや弦十郎さんに、無事に辿り着けた事を知らせなくては」
「あ～、それもエリルちゃんが済ませたらしいよぉ～」
　流石はエリル、抜け目が無いです。

「うにゅ……、あれ……、ここどこ？」
　２人で話していると、クーリェが目を覚ましました。
「クーリェの新しいお家ですよ」
「ここが……？」

寝惚け眼でキョロキョロと辺りを見回すクーリェ。知らない場所に来たのだから無理もありません。
「前に写真で見たお城のお部屋みたい……。ママ、本当はお金持ち？」
「あら、お金を全く持ってないと思ってたんですか？」
「あのエリルお姉ちゃんを見ていたらつい……」
「ふふふ、あの子はあれが気楽だからああしているだけですよ。私達が生活するのに必要なお金は、十分ありますから安心してください」
「そうなんだ……」

クーリェと一緒にお風呂に入った後、屋敷の中を案内してから、この子を宛てがった部屋に連れて行きました。聞けば自分の部屋という物を持った事がなかったそうです。そこで、使っていなかった部屋に予備の家具や電子機器を置いて、予め一人部屋の体裁を整えておいてもらいました。
「ここが貴女のお部屋ですよ。どうですか」
「クー1人で使っていいの？」
「勿論」
「本当に？」
私が頷くと、ゆっくりと部屋に入って、家具を触ったり、窓から外を眺めたりしながら、あちこち歩き回っていました。
「クーのお部屋、クーだけのお部屋……」
「気に入りました？」
「うん！」
「良かった。明日、持ってきた荷物は置くとして、今日はもう休みましょう。さっきまで寝ていたから眠たく無いかもしれませんが、夜更かしは体に良くありませんから」
「わかった」

寝巻きに着替えたクーリェをベッドに寝かせて、この子の糸のよう

な金髪をそっと撫でつけました。すると心地良さそうな表情をして、うとうとし始めました。
「ママに撫でられるの気持ちいい……」
「それは良かった。今日は疲れたでしょう。ゆっくりと休んでくださいね。何かあったら隣にある私の部屋に来てください」
「うん、おやすみなさい」
「おやすみ、クーリェ　」
　額にキスをして、この子が目を閉じたのを確認してから、私は自室に戻り、安楽椅子に座って愛用の煙管で一服しました。
「暫くは、煙草もおいそれと吸えませんね……。まぁ、娘の為なら些細なことです」
　オーディオアンプの電源を入れて、クラシック音楽を流して寛いでいるとしていると、ドアを叩く音がしました。
　開けると書類の束を持ったプルルートさんが、仕事を手伝って欲しいと頼んできました。ここの私が予め用意していたようです。
「あたしもクタクタなのにぃ～」
「私も手伝いますから頑張りましょう。それにしても、ここまで溜め込んでいたとは……」
　ネプテューヌさんやエリルが、女神だった頃を思い出してしまいました。ネプテューヌさんは怠け癖、エリルは要領の悪さで、書類が溜まってしまうことが多かったものですから。尤も私も要領が良い方ではないので、人のことは言えませんが。

「やっと終わったぁ～」
「1時間半ですか……。思ったよりも早く片付きましたね」
　時計を見ると、夜中の2時45分。寝るには少し遅い時間です。
「紅茶でも淹れてきますね」
「ありがとぉ」
　いつもの本の上に座って、ドアへと向かうと廊下からドタドタと誰かが走ってくる音が聞こえました。

何事かと思い、ドアを開けるとクーリェが部屋の中に駆け込んできました。どうしたのでしょう。
「クーリェ？」
「ママ、部屋に怖い人が！」
「何ですって……！」
こちらが留守にしている間に、不審者に入り込まれていたのでしょうか。見間違いや悪夢が原因かも知れませんが、とにかく見に行かないことには何も分かりません。
そこでプルルートさんにクーリェを任せて、戸棚に仕舞っていた25口径のピストルを片手に、あの子の部屋に向かいました。こういう時は、魔法を使うよりも拳銃を使った方が部屋の被害も少ないでしょうし、不審者を負傷させてものちの厄介な事にならずに済みます。
「エリルほど上手くはないですが……、物盗りくらいならこれでどうにかできる筈……」

ドアを開け放って部屋に入り、中を確かめると、特にクーリェ以外の誰か居たような形跡はありません。それらしき人影はないですし、呼吸や物音など絶対に人間である以上立ててしまう音も聞こえません。
灯りをつけて再度部屋の中を見回しましたが、やはり特に変わった様子はありませんね。
「部屋の中を誰かが歩き回った様子は無いですし……、そもそも不審者が侵入できる構造には……」
天井には別に屋根裏に繋がる戸はありませんし、侵入路になりうる窓を開けられた形跡も無い以上、特に誰かが入り込んだ訳でもないようですね。
「後はこの家の中くらいですね。ですが家の中の防犯カメラに怪しい物は映ってないようですから……、残る原因はあの子自身ですか……」

部屋に戻り、プルルートさんが客間に引き上げてから、クーリェに事情を聞いてみる事にしました。
「怖い夢？」
「うん……、あのね……」
話を聞くと、どうも元の世界に無理矢理連れ戻される夢を見たそうなんです。それで飛び起きて、ここに駆け込んできたようです。
「ママ……、私ここから戻らなくていいよね？　ずっとここにいていいよね？」
「勿論ですよ」
不安がるクーリェをそっと抱きしめて、安心させる為に背中を撫でながらこう続けました。
「何も心配しなくていいです。ずっと居ていいんですよ。ここは貴女の家なんですから。無理矢理連れ帰らせるなんて、私やエリルが絶対にそんな事させませんから」
「お姉ちゃんは大丈夫そうだけど、ママの小ちゃな体じゃ」
「大丈夫です。こう見えても魔法使いですから、人間相手に引けは取りません。武器を持っていたって、そうそう負けませんから」
「魔法使いなの？」
「ええ。尤も貴女の知っている物とは少し違いますけどね」
「思ってたよりもずっと凄い人なんだ……」
「ふふ、ありがとう」

その後はクーリェと一緒にベッドに入り、安心してスヤスヤと寝入るこの子を眺めていると、私も疲れから次第に目蓋が落ちて行きました。
「明日から忙しくなるから、ゆっくり体を休めておかないと……」
クーリェの為に色々準備する事が山ほどあります。その為には、体調を万全にしておかないといけません。
「子育てにはブランクがありますが……、なんとかやっていけるで

しょう。昔と違って、私はもう教祖ではありませんから余裕はありますし……、それに周りのみんなが助けてくれるから心配いりませんね……」

エリルの時のように慣れない事だらけではないですし、仕事仕事で忙しかった教祖時代に比べれば、在宅ワーク主体のお仕事を用意してもらっているからクーリェに寂しい思いをさせずに済みます。考えてみれば、至れり尽くせりです。

「この子の本当の両親のように成れるかは分かりませんが、親として目一杯甘えさせてあげられるようにしないと……」

幼い頃から苦労続きのようですし、実の両親に甘える事もままならなかったそうですから、先ずはそういうことを沢山してもらいたいものです。無論、度が過ぎないようにはするつもりですが、多少の我儘なら聞いてしまいそう。

「愛しいクーリェ……。ここでは、もう自分を必要以上に抑え込む必要は無いです。のびのびと生きてくださいな……」

もう一度、クーリェの髪の毛を撫でて、私も夢の中へと落ちていきました。